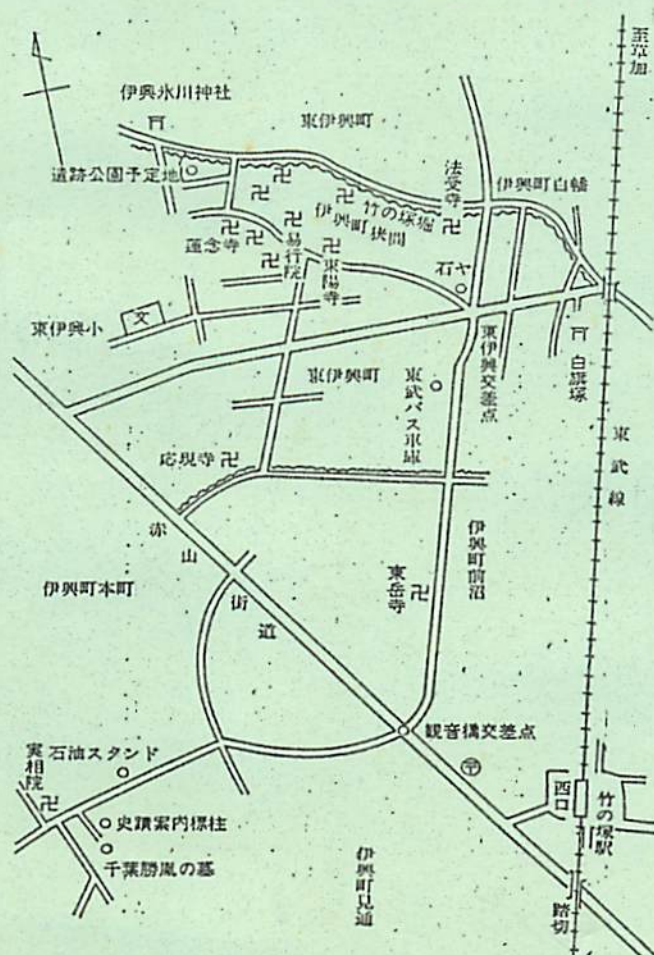


昭和 63 年 4 月 24 日 (日)

第 159 回

史跡めぐり資料

竹ノ塚駅西口 伊興方面



越谷市 郷土研究会
加藤 幸一

第159回 史跡めぐり案内

案内場所 竹ノ塚駅西口 伊興方面 (足立区)

と き 昭和63年4月24日(日)

集 合 越谷駅前 午前8時30分

コ ー ス 越谷駅 +++++ 竹ノ塚駅西口 ----¹老舗「ぬかや」----
²赤山街道 ----³観音橋の馬頭観音の跡 ----⁴王子道 ----⁵お千葉
さま(千葉次郎勝胤)の墓 ----⁶伊興の観音さま(子育て観
音) ----⁷大門及び大櫓の跡 ----⁸東岳寺(広重の墓) ----
⁹応現寺(山門) ---- 円楽師匠宅 --¹⁰《寺町にはいる》--¹¹東陽
寺(塩原多助の墓) ---- 常福寺(林家三平の墓) ----¹²易行
院(助六の墓・円楽師匠の生家と墓地) ----¹³浄光寺(寺町
に移ってきた最初の寺院・昼食) ----¹⁴新幡随院法受寺(北
朝の皇祖後深草天皇の尊像・桂昌院の墓) --《ここまで寺町》
----¹⁵伊興の氷川神社 ----¹⁶白旗塚史跡公園 ---- 竹ノ塚駅 庫バ
ス停 ⑤ 竹ノ塚駅 +++++ 越谷駅

昼食場所 伊興・寺町の浄光寺

食事は各自ご持参下さい

案内者 越谷市郷土研究会 理事 加藤 幸一

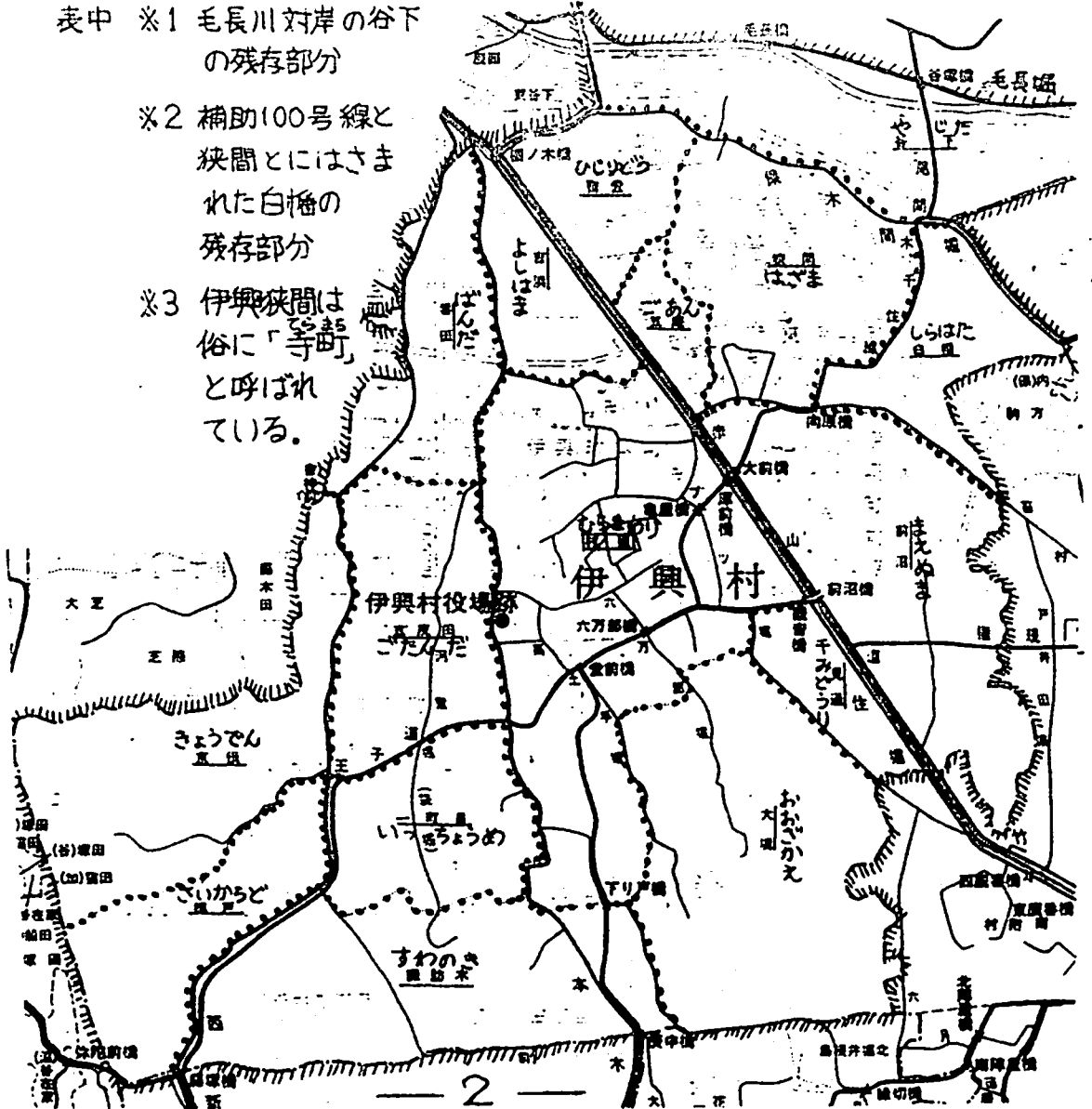
伊興村は下の表や地図のように 15の耕地に分かれていました。

耕地名	現在の地名	耕地名	現在の地名	耕地名	現在の地名
むらまわい 村廻	伊興町本町	すわのき 諏訪木	伊興町諏訪木 - 部 西新井3・4丁目	よし 吉	はま 浜
おほ 大	伊興町大境	や 谷	東伊興町 - 部 伊興町谷下(※1)	ばん 番	だ 田
みど 見通	伊興町見通	した 下	東伊興町 - 部 伊興町白橋(※2)	ご 五	た 田
ま 前	伊興町前沼	しら 白	東伊興町 - 部 伊興町白橋(※2)	た 一反	だ 田
ご 五	伊興町五庵	はた 橋	東伊興町 - 部 伊興町白橋(※2)	い 一	ち 丁目
は 狭	伊興町狭間(※3) - 部 東伊興町	ひ 聖	東伊興町	き 京	で 伝
		じ 堂		ん 戸	ち 戸

表中 ※1 毛長川対岸の谷下の
の残存部分

※2 補助100号線と
狭間とはさま
れた白橋の
残存部分

※3 伊興狭間は
俗に「寺町」
と呼ばれ
ている。



伊興村は江戸時代、表高^{おもてたか}二千石の大村であった。内訖は天領（幕府直轄地）千石、神領^{じんりやう}（御神領、東叡山領ともいい、寛永寺領のこと）千石である。なお、内高^{うちたか}（実収高）は三千石を超過したという。伊興村の鎮守^{ちんじゆ}さまは、瀧の宮^{たきのみや}米川神社であり、この宮は、保木間村、竹の塚村を含めた三村の鎮守でもあった。明治5年（1872）より伊興一村の鎮守となる。

1. 老舗「ぬかや」（岡田商店）・伊興町見通^{まへどち}1500

・新宿中村屋竹ノ塚西口店（伊興町前沼^{まへぬま}1401）の御主人・岡田長正氏の江戸っ子なまりのある話を要約すると次の通りです。

「ぬかや」（本家の「ぬかや」の屋号からとった）はこのあたりの老舗の一つで、明治の頃から万屋を商っていた。戦前は竹の塚駅周辺一帯は水田や畑が広がる閑散とした農村地帯で、西新井大師や昭和の初め頃にできた寺町の寺々がみえたと言う。その頃の西口駅前^{にしあらい}の店と言うと「ぬかや」の他に、現在の大鈴不動産あたりには、菓子・くだものなどを販売していた「かわらや」（御主人が瓦職人であった。伊興町前沼1401 小名^{おな}米氏、現在は居酒屋を経営）、その隣には、八百屋を経営する「やおはん」（吉田氏、現在は吉田そば店）くらいしかなく、また、駅前の乗り物としては「かわらや」さんがやっていた人力車が、昭和にはいってもずっとみられていたという。今と比べると、かけはなれた静かな駅前の様子が彷彿される。

「ぬかや」では竹ノ塚駅の駅員さんらを相手に昼食の弁当も頼まれて作っており、喫茶ベルクのあたりには駅長さん宅があって「ぬかや」さんともかなりの懇意にしていたという。また、「ぬかや」は、竹の塚駅で降りて通勤・通学する勤め人や女学生たちの自転車置場ともなり、雨の時、傘を善意で貸し続けた店で、竹の塚駅西口を利用した人々にとっては懐かしい店となっている。

2. 赤山街道

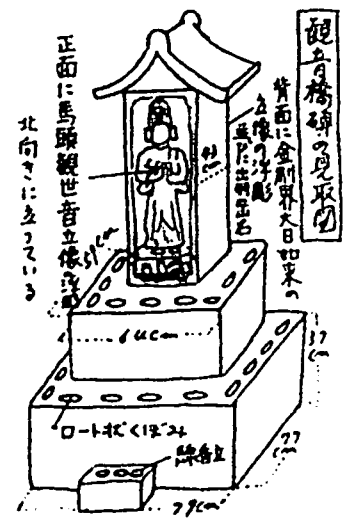
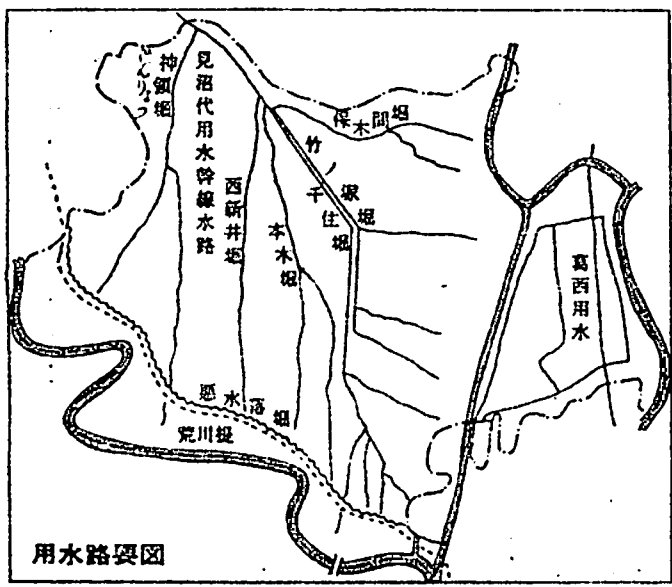
関東治水に功績^{こうせき}のあった関東郡代伊奈氏の陣屋（郡代や代官の

すまい)に通じていた街道で、^{とまり}舎人町を経て赤山(今の埼玉県川口市小室)まで伸びている。年貢はこの道を通して運ばれたのである。陣屋での郡代の仕事は今の市役所や裁判所・警察署などで、これらを一手に引き受けていたのである。

越谷や草加、浦和方面などからも赤山の陣屋へ通じる道ができていて、ここと同じく赤山街道とそれぞれ呼ばれていた。

※赤山道に沿った用水路

赤山街道に沿った両側には ^{みねま}見沼代用水の ^{ひがしべり}東縁用水から流れてくる ^{せんじゆ}千住堀(道路南側)、^{たけ}竹の ^{アガ}塚堀(道路北側)があったが、現在は排水路と化し、暗渠となっている。



3. 観音橋の馬頭観音の跡

観音橋は横田たばこ店と丸馬建設そばの千住堀にかかる橋であった。その橋のわき(横田たばこ店側)に馬頭観音の石碑があり、のち、横田たばこ店が引越してくると、横田たばこ店と「やすべい」(佐藤商店)との間に移され、さらに最近、子育て観音で有名な実相院に移された。

明治初年まで周囲数百メートルは人家が無く、遠くからもみつけやすく、他村から観音さまにお参りに来る際のよき道しるべと

なったという。観音橋の橋名はこの馬頭観音に由来するのかもしれない。

4. 王子道

東京都北区にある王子稻荷や王子権現(王子神社)に通じる道。
なお、この道の途中に 長勝寺の六万部塚の案内板がみられる。

六万部塚 (題目塚)

当塚は寿福山長勝寺開山、日座上人により1705年(江戸時代宝永2年乙酉)題目講 講衆の現当二世の安穩を祈願(小石に首題を書写し当地に埋めた事に由来する 爾来日夜の別なく妙典読誦の法声が絶えなかった為 世人これを六万部と称したという 塚碑面文に曰く「南無妙法蓮華經 為題目講 講衆中 現当二世 安樂也。宝永二年霜月十三日 立」

長勝寺

5. お千葉さま(千葉次郎勝胤)の墓

地元の人達は、千葉次郎勝胤とはいわず、敬意を込めて「お千葉様」と呼び、かつての領主さまを誇りにしている。この墓地を管理している長勝寺が、墓地の入口に掲げた説明板によると、

千葉次郎勝胤は、桓武天皇の孫にあたる高望王を祖先とし、当・上足立(荻江村、伊興村、専住〔千住〕村、沼田村、保木間村)を領していました。ところが、1564(室町時代永禄七年甲子)正月八日の国府台の戦いのおりに、岩槻城主であった太田三葉斎とともに、里見方に味方して敗れてしまいました。そこで、自分の領地である足立に逃れてきましたが、運悪くこの墓地の近くのモロコシ畑の中で、討ち死にしてしまいました。

千葉勝胤は文明3年(1471)に千葉孝胤の子として生まれ、初代常将より二十一代となる。天文2年(1533、一説に天文元年)63歳で没しているが、その生涯については謎である。佐倉城主となり、小田原城を根拠地とする後北条氏と婚を結び、後北条氏に従い、お家の安泰をはかったという。詳らかではない。佐野新田の佐野家はそのお千葉様の後裔という。

この墓を建てた者が宮城三右衛門、市原四郎兵衛、宮城忠左衛門、常田次郎左衛門とあり、氏姓から足立在住の家臣団と思われることから、在地家臣たちの建てた勝敗の供養碑と思われる。今でも、当時の家臣であった宮城家や常田家が江戸時代、名主を代々つとめた伊興の旧家として残っていて、主君の霊をお守りしている。

かつてこの墓地周辺を「千葉屋敷」とも呼ばれていたようで、もしかしたら、この地に千葉屋敷があったのかもしれない。

足立区の西側半分を宮城氏(太田氏の臣)、東側半分を千葉氏が領していたので、東側の土地では千葉氏に関係した話がかなり、伝わっているという。そこで次に千葉氏と足立区との関係を書いた「足立区の歴史」(名著出版)のp41からp43を載せます。

千葉氏と足立

足立には千葉氏に関する伝えが多い。

「千葉大系図」によれば、平良文の子の忠通が、三浦・大庭などの祖となり、弟忠頼の孫の常持が千葉郡に住して千葉氏を名乗った。それを千葉氏の初代として、五代常胤の時代に頼朝にくみして功績をあげ、子孫が広域に発展していった一族である。常胤関係では、近くは隅田の牛島神社にもあるが、本区の千住園町の日光院は、常胤の孫がその持仏の薬師を祀ったといひ、牛田の福徳として尊崇されたと伝えられている。

中世末になって、応永一七年(一四一〇)草創された島根の安福寺は、時の領主千葉太郎満胤によって建立されたと縁起にある。満胤は第一四代にあたり、応永三三年(一四二七)に卒している。『新編武蔵風土記稿』も、当区島根村の項に「応永の頃は千葉太郎の所領なるべし」と書いている。

さらにたどると、満胤の子の兼胤の子の中に賢胤という人物がおり、その註に葛西・豊嶋を領し、石浜に居すとある。この系統を本家の下総の千葉に対し、武蔵千葉と通称している。満胤の孫にあたる賢胤は、宝徳三年(一四五二)に卒している。その子の自胤については「千田七郎・通世、美濃国において死す。法号松月院」とあり墓(板橋区・松月院)もある。弟の実胤が家を継ぎ、「武州石浜・赤塚に居す」ともある。石浜はともかくとして、赤塚の城は訪ねてみると、まさに要害の地である。

そこに拠って武蔵千葉氏は、下総千葉氏の勢力を追いやったのであろうか。

本区本木には現在「中台根神社」があり、その周辺は千葉氏居城の跡といわれ、周囲には堀をめぐらし、その周辺には、出戸・小屋の内出などの小名もある。もうひとつ、保木間の淵江小学校東隣の氷川神社の社域は千葉氏の陣屋跡といひ、もとは妙見社があった。隣りの宝積院はそのゆえに北斗山という。妙見は北斗星であったからである。

『新編武蔵風土記稿』の島根村の項、永禄七年(一五六四)の文書に、「千葉殿御老母の御境忍分のために、九子村を渡し置き候、そのかわり島根村を遣し候」ともあって、足立区内に千葉氏系の所領のあったことはうかがわれる。

千葉^{ちば}自胤^{しげゆ}と松月院・赤塚城については 昭和57年4月29日の第116回史跡めぐり(赤塚地区)資料を参照のこと。

6. 伊興の観音さま(子育て観音)

観音堂(伊興観音堂)と実相院とは別であったが、明治4年(1871)に願いにより観音堂は実相院の本堂となり今日に至っている。本尊である一木造^{いちぼくぞう}の観音像は中世の作と思われ、昭和46年3月、都の重要文化財に指定された。実相院ではこの本尊を12年に1度の午年の4月にしか開帳されない秘仏としている。



木造観世音菩薩(実相院)

伊興の観音さまの信仰は江戸時代からさかんで、母乳の出ない婦人の信仰が厚く参詣人が絶えなかったという。また、戦前、本堂の西側の壁面には乳がでるようにとの願いをこめた絵馬(両方の乳房から乳汁を噴出させた絵柄となっている)が、数百枚、常時掲げられていた。なお、ここにはもと観音橋にあった馬頭観音の碑が移されている。また、すぐ近くにある伊興小学校はもと伊興村役場が置かれていた所である。

子育て観音縁起

本尊 正観世音菩薩 行基菩薩之作 立像六尺三寸

往昔 当町は沼地で 今尚一帯の地名を横沼と言ふ、天平年間(約千二百年前)行基菩薩が諸国行脚の^{よこぬま}碓 此の地に錫を止めて 池中に浮かぶ霊木を捨ひ上げ 自から大悲の尊像を刻んで一字を創立し 此の尊像を奉安した 康平年間(約九百年前)源頼義・八幡太郎義家が安部貞任追討の朝命を奉じて当地に陣し 朝敵降服並に戦捷を祈誓し 乱(前九年の役)平定後十有三町の地を寄附して境内とし 相次で武蔵守藤原成実も亦巨額の浄資を投じて荘厳なる堂塔を建立せられたが 数世を経て文永元年五月十七日(

子育て観音

足立の歴史は、毛長川沿いの舎人、伊興、花畑から始まったといわれています。

その証として、それぞれの土地から遺跡や古墳が発見されています。

ここ伊興も、その例にもれずにそうしたものがかなりあります。

当時、この伊興一帯は一部の微高地を除いては、湿地が多くあったようで、その様子を小名から想像することができず。

谷下、小西島、大西島、狭間、前沼、横沼などと、水に関係あるものがかなりあります。

子育て観音のある実相院は、横沼という所にあります。横沼といえますと、伊興の中でも南寄りの地域で、その名の示すとおり、そここに葦の生えた沼が散在していたにちがいありません。

今を去る千二百年ほど前の天平年間（七二九〜七四八）に、諸國を行脚中の行基菩薩がたまたまこの地を通りかかりました。

それは、あまりにも遠い昔のことなので、季節などは定かではありません。が、おそらく、沼の葦は風にそよぎ、その葎に巣くうヨシキリのさえずりものどかで、ここ横沼の光景は、行基菩薩の長旅の疲れを忘れさせたに違いありません。

菩薩は、やおら沼の近くにある木の切り株に腰をおろして、横沼の大自然の美しさを心ゆくまで楽しみました。

今までの旅の生活が、あまりにも慌しかったので、ここでのひと休みがどんなに嬉しかったかわかりません。

そうしたおりです。何気なく見やった菩薩の目に、沼の中で浮きつ沈みつしている異様な物が映りました。

持っていた杖で引き寄せてみますと、見た目とは違って、ドツしりとした一本の立派な木でした。さっそく沼から引き上げた菩薩は、その木のみごときに驚き、これは、神様が私にお与えくださった霊木に相違ないと思い、自らの手で二メートルにもおよぶ観音様の立像を彫りあげました。

約七百年前）火災にて焼失 現在の御堂は文永の末年 当山の中興良盛法印の再建になったのを明治廿二年更に改築修繕したものです。亦子育の由来は母乳の不足に悩む人が当山の御供米を戴き 皆御利益を賜はったので自然子育て観音と仰がれる様になったもので又開運の御仏でござり 所願成就せざるなきあらたかな観音として一般の信仰を集めています

宝光山

そして、ここに一寺を建立し、手づくりの観音様を奉安しました。これが、子育て観音の始まりです。

その後、康平六年（一〇六三）の春に、源頼義、義家父子が、奥州征伐のうちに、伊興村内の応現寺に宿陣し、この観音様に戦勝の祈願をしました。

その結果、めでたく戦さに勝てたので、十三町の寺領を寄進したそうです。

また、武蔵守藤原成実という人が、承徳年中（一〇九七〜一〇九九）に、その位階を捨てて東國に下り、この観音堂に参籠し帰依しました。

この観音様には、このようなことがありましたが、いつのころからか定かではありませんが、地元の人々は子育て観音としてあがめるようになりました。

それは、たまたま母乳不足で困っていた人が、このお寺からお供米をいただいてお祈りすると、不思議にもお乳が出るようになったからです。

こうした風聞は、瞬時に近郷近在におよび、ついには紀州宰相宗将公の耳にも入り、寛保四年（一七四四）二月には、母乳が出るようになったお礼にと、両界曼荼羅二幅の寄進がありました。それが今でも寺宝として残っています。

◎この観音様は、昭和四十六年に、東京都の重要文化財に指定されました。

◎このお寺の正規の名称は、宝光山契相院横沼寺といい、小名の横沼は、ここから出たともいわれています。沼は本堂の西北方にあつたようです。

当時は寺域も広く、現在の正門から百メートルほど南が大門跡で、大門という名の中華店があります。

現在は、伊興本町三四六一にあります。

「足立百の語り伝え」より

※区内の行基伝説

伊興の横沼（観音堂北西部の今の墓地あたりか？）の中から得た霊木から僧行基が刻んだものが当身大の一木彫の素朴な美しさをたたえる伊興の子育て観音様であるが、区内にはもう一つの行基伝説がある。足立姫の霊をなぐさめるために、行基が六体の阿弥陀如来像を刻み、さらに余木でもう一体の木こみぎ奈如来

(阿弥陀如来像)を刻んだという北宮城の性翁寺しょうみゆうの伝説である。

7. 大門だいもん及び大櫓おほいけの跡

子育て観音で知られた実相院は、昔寺域も広く現在ある門柱が、道路沿い南へ七、八十メートルのところへ山門としてありました。

土地の人は、この山門のことを大門(でえもん)と呼び、そのすぐそばにあった家のことも、でえもんと名づけ、でえもんは、その家の屋号となりました。

この家は、現在も同じ「大門」の屋号で中華料理店を経営しております。

この大門わきに、それは大きくみごとな一本の櫓がありました。幹まわりは、七、八人の子供が手をつないだくらいあり、よほどの年数を経たものとみえ、木の中心部は空洞化していました。

不思議なことに、この大櫓は春に芽ぶくと、毎年このように、南側の枝が青々と繁茂したかと思うと、北側の枝は枯れかかったように威勢が悪くなったり、北側が青々と色艶がよくなったかと思うと、南側の勢が悪くなって、南北いちように生き生きとしたことは、一度もありませんでした。

さて、この大櫓は、いつごろ、誰が植えたのでしょうか。それにつきましては、次のような話が伝わっています。

今から九百数十年ほど前の康平六年(一〇六三)に、源の頼義、義家父子が、奥州の安倍一族の反乱を鎮めるために、伊興の地を通りかかりました。

このとき、村内にある応現寺に宿陣し、ここ伊興観音に戦勝の祈願にまいりました。

新編武蔵風土記稿に、「康平六年癸卯みづのうの春」とあります。

ようやく厳しい冬も去って、木々の芽が萌えいでようとする早春、戦勝と源家の安泰を祈願した義家は、急に空腹を感じました。

春とはいっても、まだ冬のなごりの冷たい風が吹いているので、北風を避けて大門付近の日だまりで食事をすることにしました。

ところが、どこでどうしたか、あるべきはずの箸がありません。そこで、そこらに生えている木の枝を折って箸代わりに使いました。

代用の箸は、生木の香りがするとはいえ、お腹がすいていきますので、あまり気にもならずおいし

大門の家は過去帳によると今から二百数十年前にすでにここに住んでいたことがわかっている。(大門の家の御主人による)

また、大櫓の位置は 現在の道路中央のマシホールと歩道との中

間あたりであった。

く食事をすませました。

食べ終わつた義家は、お世話になつた箸をそのまま捨てる気にもなれず、その一本を大門わきの地面に突き刺しました。

その黒々とした地面は、長年落葉が積もつてきたとみえて軟らかく、箸となつた木の枝はするすると入つていきました。

それから数年後、苦戦のすえ安倍一族を平定した義家は、再び伊興観音を訪れました。

そして、戦勝のお礼を申し上げるとともに、十三丁の寺領を寄進しました。

参拝をすませた義家は、なにげなく大門わきを見ますと、さし木した木の枝の箸は、自分の背丈ほどに伸びていました。

この木の成長を見た義家は、源家の躍進を見るようだと喜びました。

その後、箸の木は源家の栄枯盛衰とは係わりなく、幾多の星霜をのりこえて、より太く、より高く、より大きく育つていきました。

こうして大樹となつたこの木は、今から三十数年前までは、通る人の目を楽しませていましたが、道路の拡幅工事のために切り倒されてしまいました。

八幡太郎義家と係わりのある大榎が、姿を消したことは寂しいことですが、今でも、「でえもん」わきの「おおいぬぎ」として、伊興の人々の心に生き続けていると思うと、心温まるおもいがします。

● 箸をさした木が、榎ではなく榊だという人もいます。

● 箸は、橋の意味があるといひます。(音通)つまり、箸をさすことによつて、神への「かけ橋」にして、我が意を神に通ずるというのです。

● 埼玉県八潮市字二丁目「家康のさした箸に芽」という話が伝わっています。

● 昔から箸にする木は、杉、松、柳、榎、竹だったようで、「箸杉」の話が、各地に残っています。

「足立百の語り伝え」より

8. 東岳寺(広重の墓)

東岳寺に広重の墓と記念碑がある。墓石はもと浅草にあったが関東大震災と戦災で破壊され、昭和33年の百回忌に再建された。「一立斎広重墓」と刻まれている。墓のそばには「あづま路に筆を残して 旅の空 西の御園の名どころを見む」という直筆

の辞世の和歌を表面台石に刻んだ記念碑がある。大正13年に建立されたものである。高さ1mほどのこの記念碑は中央に「広重」の署名を拡大して刻み、向かって右には広重の肖像、左には「一立斎広重 浮世絵風景画の大家にして 世界的に名声を博せる人

安政五年九月六日 行年六十二歳にて没す」とある。広重は江戸末期の浮世絵師で「東海道五十三次」は有名。彼は火消し（今の消防）の家に生まれた。街道物を得意とした絵師である。明治以降、安藤の姓を広重の号の上におせ、安藤広重と呼んだが実は歌川広重とする方が正当な画名である。安政5年の大流行のコレラで死

都旧跡 初代安藤広重墓 および記念碑

所在 足立区伊興町前沼1210番地 東岳寺内

指定 昭和15年6月6日

広重は浮世絵の大家で寛政8年(1796)に生まる。文化8年(1811)歌川豊広に師事し、翌年歌川広重の画姓を許された。はじめ一遊斎、次に一幽斎、一立斎、立斎を号す。諸派の画法を習得するとともに西洋画の遠近法を加味して一流をなし、はじめ美人画、役者絵等を描いたが、天保年間「東海道五十三次図」を描き一躍名声を得て、風景版画家として第一人者となった。その作風は純客観的視覚をもって自然を描き、しかもよく情趣のある日本的風景画を完成した。「東都名所」「近江八景」などは著名作。「名所江戸百景」の完成を見ず、安政5年(1858)に没した。

墓石は震災および戦災で破壊され、昭和33年百回忌に際し再建した。記念碑は大正13年に建立されたものである。

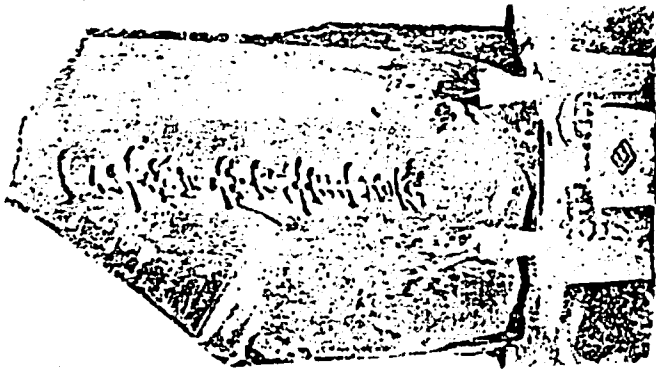
昭和43年3月1日 建設

東京都教育委員会

記念碑の隣には 広重の芸術にあこがれ、広重を海外に紹介したアメリカ人 ジョン=ステュアート=ハッパーの墓がある。その墓銘は次のように刻まれている。

米国人ハッピーは 日本在住四十六年に及び 世界に日本文化を紹介し 深く広重の芸術に憧れ 自ら広重ハッピーと称す 昭和十一年十二月十九日東京に歿す 享年七十四 知友相謀り 墓を東岳寺内広重の碑側に建つ 昭和十二年五月卅日

その他、江戸時代に嵐靡した川柳の出版元「柳多留版元花屋久次郎遺跡」の碑が建っている。



広重について

広重は、江戸八重洲河岸の定火消の子として生れ、幼名は、徳太郎、後に重右衛門と称した。父の友人、岡島林斎から「狩野派」の手ほどきを受け、十三歳の時に両親を相ついで失い不遇な時代を迎え、父祖の家業をきり、文化八年(一八一二)十五歳の時に、歌川豊広の門人となり、広重の名を与えられ、

一遊斎と号した。文化十年(一八一二)に「鳥吧に落花」を描きその後、浮世絵師として役者絵美人画を描き続けた。鳥吧北斎が、代表作「高嶽三十六景」を発表した文化十一年(一八一八)には、はからずも恩師豊広の急逝に遇い、以後、画業に励みつつ、天保元年(一八三〇)から一蘭斎と号を改め、風景を主として描き天保二、三年頃か(一八三一―一八三二)「東都名所」を発表した。西風は北斎の影響を受けている。天保三年一立斎と号し、独立独歩の考えの許に西築に精進し、同年八月(一八三二)幕府の八潮御馬場上の一行に加わり京への東海道の旅についた。この時の道中の風景や風物の写生を基にし、宿場々々の印象をまとめて、五十五枚の揃物として「東海道五十三次」を発表した。この一作は、世人の好評絶賛する所となり、風景画家として名戸を博したのである。純客観的な観察によつて、春夏秋冬の自然な姿を親しみやすい描線と色彩でふんいきを出し、雨雲、風等の自然現象を巧に織りまぜ、遠近描写法、その他いろいろの手法を用い、様々な姿の人物を巧に両面に生かした、叙情豊かな作品である。しかも、四季さまざまな趣が描写され、画集として鑑賞する時、その全体の構想またすぶる巧妙である。俳諧師四方波水が序文に「まのあたり、そこに行きたらんこちせられて、あかね所なれば……」と書ける如く、官能的な浮世絵に永く見なれた人々は、広重の性格にもよるであろうが、郷愁に似た叙情性、静寂なふんいきの漂うこの作品に接していい知れない感喜を覚えたことと思われる。なお、「東海道五十三次」には幾多の東海道ものがあり、題字が縁書で書いた「津浦東海道」、また行書で書いたので「行得東海道」がある。

天保四、五年頃から天保の終までには、広重の円熟時代で、この間に幾多の名品がある。

「京都名所」(十枚揃)、「近江八景」(八枚揃)、「浪花名所図巻」(十枚揃)等がある。その中で、京都名所の「一園」(淀川)は色彩人物、対比等まことに巧妙である。「近江八景」は、淡墨を主色とした水墨画を思わせる色調で、広重の作風をよく示しており、殊に「舟崎の夜雨」は、濃墨と藍色の対照的色彩「ふきぼかし」の技法を用いて最大のもふんいきを出しており、風俗を対象とした浮世絵で「自然」だけを描いた異色の作品である。次いで天保七、八年(一八三六―三七)に、「江戸近郊八景」(八枚揃)がある。彫、摺共によく、完成の域を思わせる作品である。中でも「飛鳥山」の背景色は、構図よく薄墨を主とし、「うかせ」の技術で雲の夕暮を遺憾なく表している。次いで、天保十一年(一八四〇)頃「木曾街道六十九次」七十枚揃の中四十六図を描いた。表現に自由さがあり、技の円熟と相まって名作である。殊に「望月」の一図は、遠近の描法、おぼろにかすませた薄墨の色彩、旅人の大小等妙味ある作品である。天保の改革は浮世絵師にも影響が多く、広重はこのころは花鳥を題材とし、二、三色の簡単な色彩によって要領よく写実的に描いている。天保もすぎ弘化も去って、晩年の安政三五年(一八五六―五八)には「名所江戸百景」百十八枚の大作がある。中でも「深川洲崎十万坪」は、構図、藍の色彩、遠景描写など注目すべき作品である。その他広重には、天童広重、一牧物、控絵など幾多の名品がある。風景画が浮世絵の一部門として、一般庶民の鑑賞絵画として普及させ完成させた功績は偉大である。(文責岡田源治)

9. 応現寺(山門)

全国的にも数少ない時宗の寺院。古くは天台宗であったが永仁の頃(1293~99)に時宗に改宗したという伊興最古の寺。山門は寛永14年(1637)に建てられた区内最古の木造建築物で、江戸初期の山門建築の特徴をよく示しているという。

この寺には、源八幡太郎義家が奥州征伐(前九年の役)の時、伊興村内の応現寺に宿陣し、観音さまに戦勝祈願したとの伝説が残る。それゆえ、応現寺はもと横沼の観音堂の近くにあったのかもしれない。そして、応現寺は観音堂の別当であり、後に現在地になにゆえか移ったが、当寺よりあまりにも離なれていたので、実相院に別当を譲ったとも推定できる。

応 現 寺

時宗、西嶋山煎雲院応現寺と称す。はじめ天台宗であったが、遊行二世真教上人の勧説により時宗に転じたという伊興地区最古の寺である。

寛永年間以降、諸堂宇が建てられ寺観整い壯観であったが、その後の天災地変で大門以外は焼失した。現存する瓦葺破風の四脚門は寛永十四年(1637)の建設で、昭和四十六年十一月に修築したが江戸初期の山門様式を伝える珍しい遺構である。また、天文七年(1538)の逆修板碑二基、永禄四年(1561)のもの一基、承応三年(1654)の石燈籠二基等がある。

このほか、足利期築造の経塚が旧寺域から発掘され、出土した兜、経筒、五鈷鈴、唐宋の古銭等は東京国立博物館に保管されている。 昭和五十一年三月 東京都足立区教育委員会

10. 寺町

伊興寺町(住所は伊興狭間)の形成は、昭和2年に築地から本堂を移してきた浄光寺が皮切りという。続いて浅草から東陽寺常福寺、易行院、正安寺、築地から長安寺、善久寺、本所から

栄寿院、下谷から法受寺、新しく蓮念寺、本行寺など昭和10年頃までに次々と移って来た。数年前に本堂を完工した専念寺を加え、現在12軒が仲良く肩を並べている。つまり、関東大震災で寺を焼かれての疎開が多く集まっている。狭間耕地は伊興で最も地盤の高い地域で人家も皆無に等しかつたので寺院の移転に適していたからであろう。

11. 東陽寺

・塩原多助の墓

東陽寺に塩原多助のモデルとなった江戸の大商人塩原屋太助の墓がある。東陽寺はもと浅草寿町こくらにあったが、関東大震災後、昭和3年に現地に墓といっしょに移転してきたもの。墓は震災の時、早く倒れ、下敷きになったおかげで火に焼かれずにすんだのである。塩原多助は落語家三遊亭円朝の作の人情噺「塩原多助一代記」の主人公で継母ちよぼに虐待され、愛馬の青あおに別れを惜しんで江戸に出て苦勞して薪炭商しんたんを営み成功し立身出世する。モデルは寛保3年(1743)に生まれ、上野沼田左新治村にいほろより江戸に出て、本所相生町ほんじよに薪炭商を営み成功した塩原屋太助である。戒名は塩原寿等である。この墓石の裏側に「塩原多助墓」と刻まれている。

・河村瑞軒の墓

瑞軒は江戸初期の商人。海運・治水の功労者である。伊勢国に生まれ、江戸に出て車引きから身を起こし、材木商となり、明暦の大火(1657)で巨利を得て、土建業を営む富豪となった。のち江戸米の東廻航路いっしやう、西廻航路にしよわいを開き、淀川の治水工事にも功があり、これらの利益で、いくたの学者を援助し、文化の向上にも尽くした。晩年150俵の旗本に登用された。鎌倉の建長寺にも墓碑がある。

・戸田茂睡の手向野の碑

東陽寺の住職の住まいの東側の庭先に置かれている。茂睡(1629-1706)は、江戸前期の歌学者である。本姓は渡辺氏で、戸田家を継ぎ、岡崎藩本多氏に仕え、後に江戸に上り、古典並びに

歌学を研究し、僧契冲や、下河辺長流などと共に、国学の先覚者となった。

・伊興遺跡

伊興の狭間耕地一帯は、学界から「武蔵伊興遺跡」と呼ばれる武蔵東部低地の重要な遺跡地である。1mも掘れば住居跡があらわれ、弥生式土器や土師器・須恵器なども出土する。出土品の特徴としては、曲玉・鏡・管玉やその模造品など「祭祀遺物」の出土の多いことである。さる32年と48年の2回の発掘で、5世紀から7世紀までの約300年間で、大集落のあったことが明らかにされた。現在、寺町の西隣に「遺跡公園予定地」の空き地(2800m²)がある。また、この付近には古墳もたくさん残っていた。今は、白幡古墳ひとつを残すのみとなった。

伊興遺跡の発掘について

西 垣 隆 雄

足立区の遺跡は毛呂川沿岸地帯、江戸袋・伊興・花畑にかけて分布しており、この伊興の遺跡は、これら遺跡群の中央部にあたるもので、弥生式後期の土器から古墳時代の各種の遺物が多数出土しており、関東でも有名な遺跡であります。昭和三十二年九月、国学院大学考古学研究室と足立区立中学校社会科研究部とが共催で、足立区教育委員会の後援のもとに発掘調査を実施し、今回の発掘は第二回目ということになりました。

近年急速な都市の発展にともない、宅地造成や住宅、工場などの建設によって遺跡と認められる箇所があたかもなくなり消滅されていく現状であります。伊興遺跡もこの例にもれず、破壊消滅されていく現状にあるので現在のうちに貴重な遺跡を調査し、悔いを残さないようにするため、足立区教育委員会の主催で今回発掘調査を実施することになりました。足立区立中学校社会科研究部はこのよき機会をとらえ、区内社会科教員の研究、郷土教育の一資料ともなり、生徒の社会科学習に役立てたいと思いこれに協力することになりました。

伊興遺跡発掘調査

- 1 主催、足立区教育委員会
- 2 発掘委託機関、国学院大学考古学第二研究室、代表者、大場登雄博士
- 3 協力、足立区立中学校社会科研究部、昭 and 第一高等学校

4 発掘場所

A 東伊興町一五の一 浅賀常男氏所有地

B 伊興町狭間八七〇 易行院所有地

C 東伊興町狭間一三の一 全竜自動車KK所有地

5 発掘期間 八月三日(金)～八月十一日(土)

6 発掘時間 午前九時～午後四時

7 出土品の保管 足立区教育委員会(郷土資料室や教育センターに展示予定)

発掘参加校は二中、三中、五中、六中、八中、九中、十中、十一中、十二中、十三中、十六中、湊江中、花畑中、東綾瀬中の十四校で、延参加教員数六〇名、延生徒数二五一名、国学院大学および昭和第一高等学校延参加学生一三名の多数に達しました。なお(C)地区の発掘は遺跡確認のために行われたもので、その確認ができたので遺物包含層上部にて発掘を中止し、埋めもどしをしたわけでありませう。多数の土師器片、有孔円板一、管状土埴一が出土しました。

今回の発掘によって五世紀から七世紀の約三百年間にわたり、大集落のあったことが明らかにされました。集落遺跡は谷下地区、常福寺地区、狭間地区の全般におよび、今回の発掘により狭間地区の(A)、(B)両地区で堅穴遺跡が発見され、床面、柱穴、貯蔵穴、灰、カマド、祭祀用の勾玉、管玉、白玉や土埴、多

数の土器類を検出することができました。当時伊興は入江か大河に直面しており、遺跡発見遺物中に多数の土器が存在することや、木臼や杵類のある土師器の存在からも推察されるように、ここに住んだ古墳時代の住民たちの生業が漁獲相半ばするものであったことが解かります。物質的に恵まれた伊興の古代住民は、その精神生活の一面として神祭りや専念し、各種の祭祀が幾度もくり返し行われたことと思います。祭祀用遺物の種類、量の豊富な点では都下随一であり、全国的にも屈指なことは彼等の生活が神靈の加護を如何に必要としていたかを物語っているものであります。

考古学上、貴重な文化財が埋蔵されている伊興の遺跡も今や破壊消滅の運命にあります。この際悔を後世に残さぬよう、伊興の遺跡の一部を史跡公園として永久に保存することを期待したいものであります。

足立史談 第66号より

故西垣隆雄氏は 現住職陰地氏の兄で 伊興遺跡の出土品の研究で有名であった。

また陰地氏の父、今はなき隆満氏は東京美術学校出身で、俳句、絵、小説、評論など多芸の異色佳臈であった。

＊林家三平師匠の墓

常福寺内にある「海老名家之墓」がそうである。

12. 易行院 (助六の墓・円楽師匠の生家と墓地)

・助六の墓

昭和3年、浅草清川町から移転してきた寺で、入口正面に歌舞伎十八番の一つ「助六縁江戸桜」で有名な花川戸助六の塚が、愛人の遊女揚巻の墓と一緒に祀られ、そへには助六地蔵がある。揚巻の墓は浅草から運んだ時に上部を欠いてしまったらしい。助六は承応2年(1653)2月11日に没した侠客である。江戸時代には助六の墓石の一部を厄難排除の効果があるといわれて持ち去る者が多かったという。そして「助六寺」として有名であった。

主人公花川戸助六、実は曾我五郎が名刀友切丸詮議のため吉原に出入りし、遊女である愛人、三浦屋の揚巻に横恋慕する意休に喧嘩を売り、遊女揚巻に通う意休を待ち伏せて殺し、ついに意休から刀を奪い返す。助六は武家階級への反骨精神をとった江戸っ子の理想像として歌舞伎で演じられており、実在の人物である。彼はもともと浅草の住人で、町抱之の鶯の着(町火消しに属した人足で、鶯口を持つ、鶯職ともいう)の名残りを最後まで伝えたといわれ、その名は、幡随院長兵衛、新門辰五郎などの同じ浅草の侠客(強きをくじき、弱きを助けるに侠の徒)と同様に人

々に親しまれたという。

なお、読売新聞 56年10月5日の記事による「助六寺」の吉河

ハカ

常明住職の助六実話によると、

主人公は人々の信頼を集めた米問屋の助八。ある時、誤って人を殺した罪人が助八を呼び「若い先短い母を残して死ぬのがつらい」と涙の訴え。助八、勝手に繩をとき放ち、身がわりで獄につなわれ病死。この助八と生前契りを交わした遊女が、年季明け後、助八の老母に葬儀を尽くし、死後、墓の前で自害する——という人情話

が相談して決めたのではと思えます。寺の宣伝にもなるし、あげまきの墓の字は後から彫ったような気がしますからね」と推測する。助六寺に早々と墓を作ったのが、落語家三遊亭円楽師匠で先代住職の四男。つまり吉河住職の弟、今も寺の近くに住む。

・円楽師匠の生家と墓地

三遊亭円楽師匠は、ここで生まれ育ち、現在もこの近くに住んでいる。また、この易行院の墓地の正面奥には、「嗚呼 名人 円楽之墓」と刻まれた円楽師匠の墓地がある。

で墓刈りをやるんです。その時、ウケを置いてきますよ。うなぎがパタパタ入ってるんです。土用うしの目なんて買ったことないですよ」

子育て観音の大門近くにそびえる黒松

この自慢のたねであった。(寛文黒松の樹齢十十分)

「へろまっ」の高さは約二〇メートル、幹の周囲二・七〇メートル、葉形の美しさは伊興町のびに保存樹の指定をうけたのを手始めとし、伊興町の「へろまっ」は二十番目に指定された。を守らうというが趣旨である。郡内では、千代田区の埴田神社の「いちやう」が昭和四十年十一月よって定められたもので、都市化とともに姿を消していく名木を保存して、緑の多い町の景観や風致維持するための黒木の保存に関する法律」に

第一四二号で制定された「伊興町の黒松風致を「保存樹」とするのは、昭和三十七年法律東京府知事から「保存樹」として指定された。この松が、昭和四十七年二月二十二日行で百年と思われる「へろまっ」が繁っている。はれる稲荷神社があるが、その境内に樹齢数に、通称「拙匠稲荷」とよ伊興町水町三二〇五番地

保存樹



保存樹となった黒松

13. 伊興の浄光寺

昭和の初め頃に トッポを切ってこの寺町にやってきた寺院。つまり、この狭間耕地に寺町を作るきっかけとなった寺院といえる。

14. 伊興の氷川神社

伊興氷川神社(伊興町谷下三二〇) 狭間地区の北を谷下^{たにげ}という。谷下の北側を毛長川が流れている。伊興の氷川神社はこの谷下^{たにげ}にあり、伊興遺跡の中心地で、五世紀ごろの祭祀遺物や住居跡がよく出土したところである。したがってこの氷川神社も歴史が古く、かつては淵江領四二カ村の総鎮守で「淵の宮」といわれ、足立区文化の発祥の地でもあった。現在は伊興町の鎮守である。

境内はうっそうと杉樺の古木におおわれて森をなし、社殿はやや台地にあって素朴な古めかしさを備えている。二〇年前の調査では「慶長十四年(一六〇九)三月十八日伊興氷川大明神大檀主御代官河内与兵衛知親」と記された古い棟札があったという。いくたびかの災変や改築を経て、現在の社殿は明治二二年十一月の造営である。享保二二年(一七三七)の織立^{オリタテ}台などがある。

氷川神社(湫之宮)
 祭神 須佐之男命 大己貴命 櫛稲田姫命
 末社 浅間社 稻荷社 白旗社(白旗古墳)

当社は足立区内最古の氷川社で、昔は湫江領四十ハケ村の総領守であった。のち伊興・竹塚・保木間三村の鎮守となり、明治5年から伊興村のみの鎮守となった。

海底にあった足立区が陸地化してきた過程で、この付近が最も早く陸地化し、大宮台地辺から人びとが移り住み、関東-之宮である大宮の氷川社をここに勧請したという。当時この周辺は深い湫であったところから「湫の宮」といわれ、また、本区一帯に湫江の呼称が生まれ、やがて湫江郷とか湫江領とかの名を生じたという。

付近一帯から弥生式土器・土師器・須恵器、また鏡・曲玉、管玉などの祭祀遺物や漁具としての土錘が出土して、伊興遺跡といわれる埋蔵文化財包蔵地を形成している。

昭和55年3月 東京都足立区教育委員会

15. 新幡随院 法受寺

法受寺(伊興町狭間九三〇) 氷川前の通りを

東に行くとなり法受寺がある。昭和一〇年、下谷三崎町の法受寺と浅草の安養寺が合併されてこの地に建立された。法受寺はもと尾久にあって、正応二年(一二八九)鎌倉幕府八代將軍となつた久明親王が、このころに納めたという御父皇、後深草院繁実法皇の御位牌がある。

また、嘉元二年(一三〇四)の奉納と伝わる後深草法皇の木像が、寛政二年(一七九〇)に造られた厨子に納められている。

一方、安養寺からは、江戸幕府五代將軍綱吉の生母で、のちに大奥にあって勢力をふるつた桂昌院の墓をはじめ、その義父・実母の墓、桂昌院の墓を

昌院の弟で笠間城主本在宗資の墓

など本在家累代の墓が移ってきている。

また、歴史小説や談話で名高い、関口流

柔術家関口弥太郎の墓もある。

法 受 寺

当寺は、正暦3年(992)、恵心僧都によって、豊島郡下尾久の地に、天台宗恵心院法受寺として開創され、文永元年(1264)浄土宗に改宗された。宝暦3年(1753)豊島郡谷中に移転し、新幡随院法受寺と称したが、関東大震災後、下谷三崎町の法受寺と浅草の照光山安養寺とが合併して、昭和十年に現在地に建立された。草創以来九百九十余年に及ぶ古寺である。

当寺には、嘉元二年(1304)の奉納と伝わる鎌倉幕府八代将軍久明親王の父、後深草法皇の法体木像ならびに正応三年(1290)に納められたという御尊牌がある。

また五代将軍徳川綱吉の生母、桂昌院の墓がある。将軍の生母として大奥に絶大な勢力を振り、女性にとって最高の位階である従一位を生前贈られている。この墓は区の登録文化財になっている。同じ墓域に常陸国笠間城主本庄宗資の墓や、柔術家関口弥太郎の墓、書家墨菴の墓などがある。

昭和63年2月 東京都足立区教育委員会

下は 第144回 史跡めぐり資料(谷中方面)

※朝日湯から谷中小学校にかけて

このあたりに新幡随院法住寺という寺院が建っていて、旗本の娘お雲が幽霊となって新三郎に会いにくるという、円朝の落語「牡丹灯籠」の舞台ともなった所、芝居で牡丹灯籠を演じる時は、たたりがないようにと役者達がお参りに来た寺である。

・桂昌院の墓

法受寺に徳川五代将軍綱吉の生母である桂昌院の墓がある。墓石には「桂昌院殿 従一位 仁營興国恵光大姉」とある。桂昌院は寛永元年(1624)に京都に生まれる。八百屋仁右衛門の娘で名は光子(阿玉)、後に吉子と改める。二条家臣本庄氏の養女とな

り、鷹司信房の娘が三代将軍家光に嫁するに従って江戸城中にはいり、将軍家光の妾となって五代将軍綱吉を生み、家光死後出家して桂昌院と号し、大奥での権勢は強大であったばかりか綱吉の政治を大きく左右させた。仏教の信仰厚く、綱吉の「生類憐みの令」は、彼女の勧めによるところが大きいという。桂昌院は、元禄14年(1701)、柳沢吉保の尽力で異例の従一位を朝廷から賜わったが、従一位は将軍正夫人のみ許される位階であった。

16. 白旗塚史跡公園

都史跡 白旗塚古墳

所在 足立区東伊興町30番10号

指定 昭和50年2月6日

直径約12メートル、高さ約2.5メートルの円墳であるが、その内容は不明である。この付近の毛長堀南岸には、かつて播鉢塚、甲塚、船山塚などの古墳があり、伊興古墳群を形成していたが、現在は本墳が残るのみ。このうちの播鉢塚からは、人物・馬・円筒埴輪の出土が知られ、この古墳群が築造された年代はおおよそ五～六世紀と推定される。

また、氷川神社付近には豊富な祭祀遺物を出土する集落址(伊興遺跡)がある。伊興古墳群は、この集落址との関係と合わせ、東部低地の歴史を考える上で貴重である。

昭和51年3月15日 建設 東京都教育委員会

白旗塚のいわれは、康平5年(1062)源頼義・義家父子が奥州安部氏の反乱を鎮圧するため千住からここに来て、土地の豪族の攻撃にあい、苦闘のすえ勝利をおさめた時、この地に白旗を立てたのでこう呼ぶようになったと伝えられる。

この他の区内の義家の伝説は次の通りである。

①六月町の炎天寺と八幡宮 ②花畑の鷲神社 ③花畑の矢取弁天

④伊興の応興寺と観音堂 ⑤千住の八幡神社 があげられる

白旗塚 (白幡塚)

白旗塚は、東伊興町三〇一〇にあります。伊興の七曲がりから観音橋を経て、東伊興町の十字路を東武線を目標に右折すると、ほどなく右側に、高さ二・五メートル、広さ六〇平方メートルほどの円墳が見えます。これが白旗塚です。

この付近には、以前、搦鉢塚、甲塚、船山塚などいわずゆる伊興古墳群がありました。宅地の造成などによって取り壊われ、残っているのは、この白旗塚ただ一つだけです。

現在は、八本ほどのさして大きくもない松が生い茂り、鳥居をくぐり抜けるとその中心部に、「白旗大神 明治二十一年建立」と記された石碑があるだけです。

この白旗塚は、源頼義、義家親子が奥州安倍一族の反乱鎮圧のためにこの地を通り、そのおり源氏の旗印である白旗を立て旗かせたことから、その名がついたといわれております。

白旗を立てたことについては、土地の野武士に襲われ、それをしりぞけたときに立てたというのと、奥州からの帰途、その凱旋を祝すために立てたというのとがあります。

いずれにしても、白旗を立てたことには違いありません。また、次のような話も伝わっています。

その昔、ここは、もともと神社の土地でした。そして、小さいながらも祠が建っていました。ところが、地元の人達は、この塚に近寄るとたたりがあると恐れて、誰一人として立ち寄りませんでした。

そのために、せつかくあった祠も手入れがいきとどかずに、朽ち果ててしまいました。

塚の上には、古い大きな松の木が茂っており、その枝ぶりの良さは、このあたりの景観を一段とひきたてておりました。

しかし、これもまた、訪れる人のないままに立ち枯れてしまい、たまたま吹いた大風によって倒されてしまいました。

すると、不思議なことに、吹き倒された木の根方から、たくさん武器が顔をのぞかせました。

それを見た村民の一人が、数多くある武器の中から、気に入った刀を一振り家に持ち帰りました。するとどうでしょう。その日の晩から一家の者全部が大病に罹ってしまいました。持ち帰った人はたたりの恐ろしさを知って、すぐにその刀をもとあつた所へ埋めなおし、その上に、松の木二本を新たに植えました。

やがて、家の者の大病も治り、植えた二本の松も年とともに大木へと成長していきました。地元の人達は、これを二本松と呼ぶようになったとのこと。

現在では、この松も枯れて何代目かははっきりしませんが、大きくもない松が、八本ほど肩を寄せ合うように立って、僅かながらも昔のなごりをとどめております。

●杉並区に、おこり塚、というのがあります。ここを発掘すると、おこり、になるというので、この名がついたようですが、白旗塚同様古墳を保護するための伝説とおもわれます。

六 本 杉

伊興白旗塚のことを、地元では、『二本松』とか『六本杉』とも呼んでいます。

この『六本杉』という呼び名につきましては、次のような話が伝わっています。

奥州の平定を命ぜられた八幡太郎義家の軍勢は、箱根越えをして、ようやく当地にさしかかりました。

そのおり、安倍一族に味方した地元野武士に急襲されたので応戦しました。

この合戦は、長旅で疲れているところを不意をつかれましたので、思いのほか長びき苦戦をしました。

やがて、戦さが小康状態に入りましたので、その合間に腹ごしらえをしようとした義家の家来三人は、まわりの様子がよく見える、塚状をしたこの地に腰をおろすことにしました。

さっそく一面に生えている雑草を踏み敷いて、昼食をとりました。

食事をすませた三人の武士は、自分達が使った箸を、塚上に等間隔にさして、戦勝を祈願しました。

箸は橋に通ずるとか申しますが、自分たちのこの戦勝の思いが、塚にさした箸をかけ橋として神様に通ずることを信じて、そうしたにちがいありません。

さした箸が効を奏したのか、戦さは味方に勝利をもたらして終わりました。その後、何日か経つと、さした六本の箸は、杉の芽をふき年ごとに成長していききました。

そして、数十年もすると、六本の杉の木は、塚を屋根のように覆い、かなり遠くからでも見ることができました。

そこで、六本の大きな杉の木の繁茂するこの塚を、『六本杉』と呼ぶようになりました。

しかし、落雷によって三本の木が引き裂かれ、仲良く立ち並んでいた六本の杉が、三本に減ってしまいました。

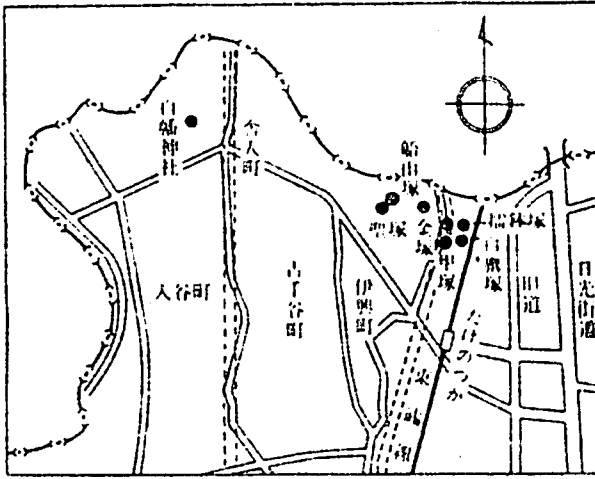
こうして六本杉の面影はなくなってしまいました。昔の様子を知っている地元の人々は、いまだに六本杉と呼んでいます。

大正末から昭和初期にかけて作られた『南足立郡郷土教育研究資料』に、

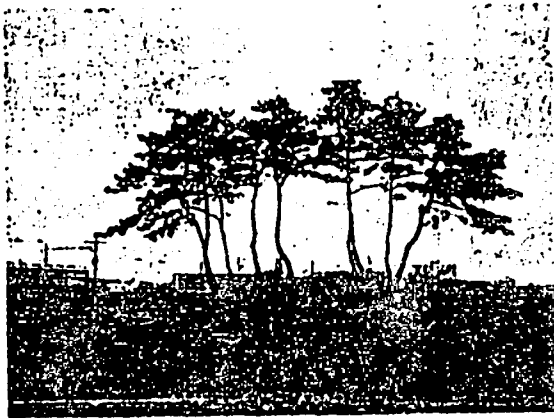
「現在は三本の杉と十四本の小松のある塚である。誰も訪れる者もないが、田圃の中にあつて、小径すらない蛇の棲むに任せる殿になっている。」とあります。

『六本杉』の別名のあるこの場所も、今では一本の杉さえもなく、昔の面影はどこにもとめておりません。

伊興狭間の古墳の分布



古墳分布図



白旗塚 (伊興町白幡)

古墳の分布は、毛長瀬沿岸の花畑の大鷲神社周辺と仲組、伊興の白幡・谷下・聖堂および竹塚、入谷、大谷田、埼玉県の谷塚にわたっていたが、すでに取り崩されたものが多く、原形を保っているものは少ない。しかし竹の塚や谷塚などに地名として残っているのは興味深い。

伊興の北部には白旗塚・甲塚・掘鉢塚・金塚・船山塚・柳塚などの古墳があり、これらの塚は伊興町の白幡・谷下・聖堂などの元耕地に分布していたが、現在は白旗塚をのぞいて、原形を保っていない。このように、この付近一帯には、古墳と思われるものが多く、埴輪・武器・装身具など、古墳関係の遺物が多く出土している。

竹の塚車庫 (竹の塚駅行) 休日 160円				
・は車庫始発				
14	03	30	38	52 58
15	08	26	33	54
16	00	26	50	55
17	20	23	43	51

簡単なものを作って二十八日から三十日の間にかざった。この時門松も立てられた。三十一日に門松やしめ縄をかざるの一夜かざりと称してきらわれていた。

すす払いの済んだ後かまや（土間にある勝手のこと）にある鉄鍋用と鉄びん用の自在かぎの縄を交換した。これは一年使用することにより真黒になるからである。この縄は自家産の藁を良くたたいて三本あみにしたものである。

十二月二十八日—三十日、餅つき

この間の一日、午前一時頃起床して一俵から二俵の餅をついた。

この餅は普通のもち米だけの白い餅の外に「もろこしもち」「きみもち」「ひきもち」があった。もろこしもちはもろこし（唐きび）で畑の囲りに植えたものである。赤褐色の餅である。きみ餅は桃太郎のきみ団子のきみであり、黄色の餅である。ひき餅はくず米を石臼で粉にしたもので「しきもち」と呼ばれていた。色は黒味がかっていた。以上三種の餅はもち米をつなぎに混入していた。

三十一日に餅をつくのは一夜餅とてきらわされたのは、正月かざりと同様である。

足立史談 第65号(S48・7)から第96号にのった連載記事「足立区史跡めぐり 伊興村を訪ねて」(須賀源蔵氏著)の(1)〜(27)を集めたものです。

「新修 足立区史」

- 旗塚 > 伊興町白幡一〇〇六番地 > 面積約六〇平方メートル(十八坪) 円墳。この塚があるので付近を白幡排地とい¹⁰¹った。伊興町の東部にあり、以前ここに杉の古木が六本あったので、六本杉とい、また塚ともいう(百有地第一種)現在では松が数本植えられている。
- 甲塚 > 伊興町白幡九七七番地 > 面積約一七九平方メートル(五十四坪) 円墳。松が二本あったところか二本松ともいわれている。
- 掘鉢塚 > 伊興町白幡九八四番地 > 面積約一〇平方メートル(六坪) 円墳。周囲が高く、中央部に凹がわので掘鉢塚といふ。
- このほかにも小塚が三か所あった。
- 金塚 > 伊興町谷下三三五番地 > 面積約三三六平方メートル(四十二坪) 方墳(?)。伊興町の北部にあり。
- 船山塚 > 伊興町谷下三七四番地 > 面積約二二九平方メートル(三十九坪) 円墳。谷下段に接している。
- 型塚 > 伊興町型堂三八二番地 > 面積約三三平方メートル(七坪) 円墳。

伊興村を訪ねて

須賀源蔵

「伊興は二千石の村であった」と、私は幼時祖母から教えられた。「二千石の村」と語る祖母の言葉の響きからは、ひそかに誇りらしいものが感じとることができた。

この祖母は「淵之宮の氷川神社」や「子育観音」に算額を掲げた須賀三治郎邦慶（後に家名又左衛門を襲名）の娘である。（算額については本紙発表済み）。

当時の私には、この「二千石の村」にどんな意味があるか全くわからなかった。

足立区内にも、江戸時代から明治初年までは、内匠新田のごとく四十石未満の村もあったし、通常の村は、百石台から数百石程度のものが多数であったから、村高二千石は当時にあつては稀有の大村であったわけである。この「二千石の村」伊興の史跡やら、忘れ去られようとしているものもろもろの事どもを、順を追って紹介させていただくこととする。東武線の竹の塚駅の所在地は伊興前沼（まえぬま）の一角であつて旧竹の塚ではない。

前沼は土地なまりで「めいぬま」と呼ばれていた。この前沼は耕地名である。伊興はこ

の外につきの十五の耕地に分れていた。谷下（やじた）聖堂（ひじりどう）、五庵（ごあん）、狭間（はざま）、白幡（しらはた）、見通（みどおり）、大境（おおさかえ）、諏防木（すわのき）、一丁目（いちちようめ）五反田（ごたんだ）、村廻（むらまわり）、吉浜（よしはま）、番田（ばんだ）、京伝（きょうでん）、槐戸（さいかちど）。

この中で、村廻は、昭和七年十月一日に東京府南足立郡伊興村から、東京府東京市足立区伊興町と変更された際、伊興町本町となつた。

他の耕地については、市郡併合の際、それぞれ、伊興町前沼・伊興町白幡など公称されることになった。しかしながら京伝や白幡などはこの後十数年間人家皆無の状態であつた。谷下は（やじた）、大境は（おおさかえ）、見通は（めどおり）、槐戸は（さいかちど）などと土地なまりで呼ばれていた。

諏訪木は現足立工業の所在地で「すわぎ」と読む人が多いが、正しくは「すわのき」である。伊興を訪ねるには、竹の塚駅（東武線）を下車、西口を出て小名木商店（かわらや）前を通り南北に通ずる道路に突き当る。そこに岡田商店（ぬかや）がある。かわらや、ぬかや、の二軒がこの老舗（しにせ）である。

この道路が赤山街道で現在は暗渠となつているが、西側が千住堀、東側が竹の塚堀である。この赤山街道を北に三百メートルほど行つたところが伊興町前沼の十字路である。

この十字路は観音橋（かんのんばし）と言われている地点である。この角の横田タバコ店と隣の佐藤商店の間に、正面が馬頭観世音になつてゐる大きな碑がある。碑の西側面に正観世音菩薩元禄六癸酉十月紀州熊野尾鷲三郎兵衛とあり、右に文政十三寅十二月立之とあつて、台石は古色を帯びてゐる。

観音橋の碑を更にくわしく調べると、正面の上方に馬頭観世音を浮彫りにし、下方の台座には『為往来通行馬・安全奉安置之』と二行に刻し、その下に『世話人、施主』として増田橋左屋喜右衛門・同長藏等若干人をするし次に「伊興村馬持」と前置して山崎某以下十九人（これは台座の前に花立の石がついてゐるため百字の部分しか判明しない）次に「立方」として小櫃弥右エ門・小川政七・藤波岩次郎・竹之内源治右三門と刻ぎまわつてゐる。東側面には、早房地主古姓源蔵・先達天

果限・三山願主北根大○院・正観世音願主下
り戸足立弥治右エ門・馬頭願主早房小川○五
郎・古姓三良左エ門(○印は欠落)とあり、
西側面に「これより三丁」と子育観音までの
距離がしるされている。また碑の背面の下部
と西側面に、当時の伊興の人名が刻さまれて
いる。その数四十余人。昼間喜兵衛・須賀又
左衛門・須賀平蔵・鯨井文蔵・常田孫左エ門
岩井金左エ門・矢萩兵右エ門などである。こ
の碑は元禄六年に建立し、一度倒壊したもの
が、文政十三年に再建されたものであること
が、二つの銘文で知ることが出来る。この碑
の周囲数百メートルは、明治初年まで人家皆
無で、一面耕地の中に高くそびえていたもの
で、現在の竹の塚駅の近くからでも望見でき
たものであろう。そして他村から子育観音に
お参りする良き目標となり、観音橋の地名が
定着したものと推定できる。交通の重要な分
岐点にあるこの碑の存在の意義の極めて大き
かったことを改めて考えさせられた。挙村愿
勢で建立されたこの碑に、その大部分は百姓
と思われる人々が苗字を使用していることに
対し、不審感をいだく人が現在でもいて、私
もこのことについて何回か質問を受けたこと
があるので、この機会に日本人の苗字につい
て一言述べておく。

一般に多くの人が信じている如く、江戸時
代に百姓町人に苗字がなかったのではなく、
各家には、それぞれその家伝来の苗字を持っ
ていた(たとえば須賀一族については、足立
において、徳川家康が入部する二百数十年以
前からその姓を名乗り、現在に至るまで定着
しているのである)。ただし苗字の公称は武士
その他小数の特に許可されたもの以外は禁止
されていた。しかし私称は祖先以来引きつが
れて、家の苗字は足立土着の家については正
しくうけつがれていたのである。一部の説の
如く、明治初年に役場の吏員などに作られた
という苗字は、足立においてはほとんどなか
ったのである。

公称の場合、水帳・人別帳・証文などにし
るす署名、願書類などの公文書には名のみ書
き、姓は特に公認された人物以外は用いるこ
とができなかった。記念碑に刻する姓名、神
社仏閣に奉納する際のものなどには、私称と
して用いたものである。私の家を例にとれば
曾祖父が伊興氷川社に奉献した算額には須賀
三治郎邦慶とし、高祖父が、高野山で月
碑を受けたときの宛名には須賀又左エ門殿と
あり、これが私的なもので、公的となると、
同じ高祖父が、盗難届を火附盗賊改役に提出
したときには、「乍恐書付を以て申しあげ奉り
候」と見出しに始り、東叡山領武州足立郡伊
興村百姓又差エ門申し上げ奉り候とあって、
この場合は苗字をつけていない。また質地証
文(事案上の土地売買証文)にも同じく名の
みをしるしてある。このように同じ一人物で
あっても、公称は名のみ、私称は姓名とそれ
ぞれ使い分けているのである。

屋号(やごう)について
江戸時代の伊興の住民は古来苗字を私称し
ていた事実については前号に詳述した通りで
ある。しかしながら当時当地の住民は互に私
的に苗字を呼び合うことはなかった。これに
代るものとして、人々は屋号を用いていた。

古い当地の家にはおのおの独自の屋号が
あって、その屋号で家を言いあらわす習慣に
なっていた。屋号にはいろいろな由来があっ
て、その由来によって分類すると、①先祖の
名前をそのまま用いるもの、②家の成立を示
すもの、③先祖の行なった職業(内職などもあ
る)によるもの、④家の所在地に関するもの
⑤ニックネームなどによるものなどである。

①実名を屋号とするものに
多くの家では祖先の名を襲名することが一
般であった。筆者の家は、須賀又左衛門家で
代々又左衛門を襲名してきた(最後の又左衛
門は筆者の曾祖父で本名は三治郎)、そこで
私の家と呼ぶには又左衛門殿を転訛して又せ
むどん、となり更にこれが「又でんどん」と
呼ばれるようになった。ただしこの「またで
んどん」という呼び方は、又左衛門なる人物
を指すものではなく、又左衛門さんの家とい
う意味になってしまったわけである。個人又
左衛門を呼ぶには、又せむどんかまたは又せ
むさん、であった。この例にしたがうものに、
須賀平蔵家では平蔵どんが「へどどん」と呼
ばれていて、多くの人はどんな文字かわから
ないまま「へどどん」と呼んでいた。この例

「仁ざんどん」山崎は左衛門家は「仁ざんどん」矢萩兵右衛門家は「ひょうえんどん」等々……土地訛で呼びつがれて、現在でもこの呼び方が用いられている。但し特に親しい場合を除いて、その家の人にこの屋号をもって呼ぶことはなく、苗字にさんを付けて呼ぶのが一般である。間接にある家をさす場合は、簡明なので今でも屋号を用いる場合が多い。同姓の家が複数の場合、屋号で区別するのが最も便利である。

②家の成立に関する屋号

六家が伊興に存在して伊興村内に分家した家には、その祖先の名の頭文字を冠して「〇いもち」と呼んでいる。例えは幸野常義家では「幸いもち」と言われ、昼間伊三郎家では「伊三いもち」であり、はなぞの幼稚園の跡田氏は「喜いもち」と呼ばれている。この外に分家として、新宅(しんたく)と呼ばれる家があるが、実はこの家は三百年以上の旧家であるが、今もって、この屋号が伝承されている。この系統の呼び方として、新家(しんや)新屋(しんい)新百姓などがあって、それぞれ呼び分けられている。

③祖先の行なった職種を屋号とするもの

ある時代はその家で何等かの職業(内職的な場合が多い)や役職についた場合、それを呼ぶ例も多い。当地では、餅屋(ぬかや)たばこや、古着屋、傘屋、仕立屋、豆腐屋、かわらや、醤油屋などで、醤油屋は(しんゆや)

と呼んでいる。ここにあげた職業と現在の職業とは無関係で、一軒も屋号と同じ職業の家はない。ほとんどが、最近までは農家であった。

④その家の所在地に関する屋号

「出口(でくち)は伊興村の東方の出口にあたる家との意味であるが、この家は観音橋の西方百メートル余、旧村警住宅の南の二軒家であった、一軒は退転し一軒は浅香新蔵氏宅である。現在は伊興の中心部であるが、昔は村はずれであった。三角屋敷、三角形の宅地に居住している故の屋号、現在三角形の頂点の部分に立岡正子氏が居住している、後方に居住する地主の田中氏の家を三角屋敷と呼んでいる。「大門(でいもん)と土地訛で呼ぶのは子首親音の大門跡といわれている。地蔵様、妙蓮庵とその隣家の屋号である。六万部(ろくまんべ)、六万部塚の近傍の家を指す。田中(たなか)田圃の中の一軒家からきた名称、この屋号の家は、西島に一軒、横沼に二軒、横沼の二軒は親田中(おやたなか)、子田中(こたなか)と区別されている。親田中は、親が末子と共に分家した由である。西島の田中は、藤波氏で西島藤波一家の総木家、横沼の田中は、竹内氏である。「北海道」は村の最北端の一軒屋で、これは最も新しい屋号、塚元(つかもと)はこの反対に最南端の一軒家で庚申塚の近くの家の意である。

⑤ニックネームらしきもの

空鞍(からっくら)、この家の祖先は駄馬

による「空鞍」家としていた由で、今日の荷はどうかと問われると、「今日もからっくらだ」と、そのたびごとに答えていたが、その突これに反し勤勉に働き大いに財産を殖し、伊興第一の地主となった。農地改革前は「常田」、「空鞍」と並び称されていた名家である。今日でも、もうかつた話をする人は金が無く、損ばかりしている話をする人は財をなす人が多い。右の話は心ある古老が美談として語り継いだ物語りである。

屋号について (2)

早房明子(はやぶさずし) (伊興村の厨子)については後述する)に「ごくら」と呼ばれる家がある。この家は横沼厨子の昼間氏の出で、祖先が江戸に出て御家人の味を得て武士となったが、武家生活の窮乏をいとい再び帰農し、「ごくら」すなわち郷倉の跡地に居し現在に至っている。この郷倉の規模は不明であるが、三河屋の良質の瓦で屋根をふいてあった由である。

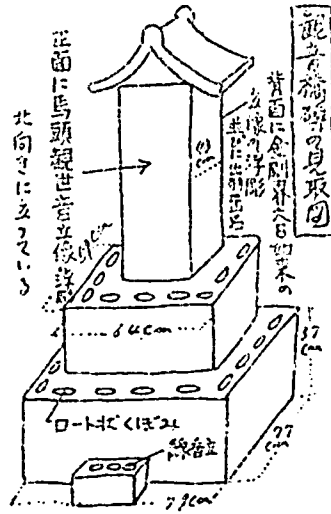
これに関連あるものとして「くらめえ」すなわち倉前(くらまえ)と土地訛りで呼ばれている家が前述の「ごくら」の北方に現存している。これは郷倉の前との意である。

類似の屋号に「かんのんめえ」「てらめえ」がある。「かんのんめえ」は観音前、すなわち子首親音、実相院の前の家との意であるが藤波自動車K.K.の藤波家一軒を指している。

「てらめえ」は寺の前、ここでは志現寺の前の家で、山門の東前方の鐘井家一軒を指している。

再び観音橋の碑について

観音橋の碑は見取図で示したように全高が二メートル余りあって、その台座の上表面等には直径三一五センチメートルの円錐形のくぼみが多数認められる。これは昭和初年までの当地の子供達のままごと遊びの遺跡である。この土地では彼岸には「あとさき団子になかばたもち」と称して、彼岸の入り、彼岸の



明けには団子を作り、中日にはおはぎを作って寺参りや親類等の進物とした。

この場合には作る団子は「もぐさ」で緑色に着色した「草団子」(くさだんご)と草を入れない生地(きじ)の白団子である。

子供達七七八才から十才にもなれば草団子用のよもぎを摘むのが役目であった。この摘み草を「もち草摘み」となえられていた。大人たちはこの草を粳米(うるちまい)を石臼(いすす)といった)で製粉したものを練り固め「せいろ」でむし白で湯き込んで、婦人達が手で丸め草団子とした。

別に草い入れない白い団子をほぼ等量作り重箱につめ寺参りに持参したものである。

家庭ではまず皿に盛り神仏に供えてから、各自が食用に供した。この場合、あん、きな粉、醤油等をつけた。

現金収入の乏しい当時にあつては、子供達は「ぜに」のいらぬ遊びを考案した。「もち草」等を摘んで紡錘形の石ころを「きね」とし、石碑の台石等適当な高さの上面が平左右を白の代用として、「もちつきごっこ」のままごと遊びをした。この遊びの起源は不明であるが、二百年から三百年以前からの伝承と考えることができる。この年数は硬い石にある深いくぼみから推測できる年輪である。このような台石のくぼみは子育観音の大鼓橋の欄干や庚塚塚等にも認められ、相当広い地域に分布していたものである。

東岳寺について

竹の塚駅西口を出て赤山街道を北進し観音橋の十字路を右折して二百メートルほど行ったところで道路の左側に東岳寺がある。前沼一〇番地がその住所である。曹洞宗だが戦後独立して単立寺となったので本山、末寺の關係はない。「東海道五十三次」などの浮世絵で有名な安藤広重の墓がある。

広重は安政五年に大流行のコレラで死亡し当時浅草の東岳寺に埋葬された。昭和三十二年に広重の百回忌の折にその墓がこの寺に移された。この墓は東京都の旧跡に指定されている。この寺は関東大震災の後当地に移築さ

れた。この外に川柳の柳樽の版元花屋久次郎の記念碑も最近建立された。また広重を海外に紹介した米国人ジョン・スチュアート・ハッパリーの墓もある。

六本杉について

東岳寺の前の道路(この道路を最近までは土着の人は往還「おうかん」と呼んでいた)を安行方面に向って北進すること約三百メートル、手前の東伊興町の交叉点を右折し約百メートルのところ、吉永製菓ビルの東側の右に芦の茂った旧耕田の中に小松原で覆われた小島が有名な白旗塚である。所在地は伊興町白幡一〇〇六番地である。

この白旗塚のことを近郷近在の人々は古くから「六本杉」(あつぼんすぎ)と呼んでいた。今でも土地の古老などでは六本杉の方が通りがよい。もとは六本の杉の巨木があつて、二、三キロメートルの遠方からでも望見できて、良き目標となつていたのである。

昭和の初年頃は半ば枯れた巨木が四本残つていたのを私自身も東武電車で竹の塚から谷塚に向う往復の車中で幾百回となく望見してきたのである。この杉も昭和十年頃までに相繼いで枯れ果てて現在の小松を残すようになった。

白旗塚の古記録を紹介する

新編武蔵風土記稿足立郡の部巻三伊興村の条に「白旗塚」と題して、次の如くある。東ノ方ニアリ此塚アルヲ以テ白旗耕地ト字セリ塚ノ除地二十二歩百姓持ナリ上代八幡

太郎義家奥州征伐ノ時此所ニ旗ヲナヒカン
平勝利アリシトテ此名ヲ伝ヘン由來社地ニ
シテ祠モアリシナレド此塚ニ近寄バ然アリ
トテ村民畏レテ近ヅカザルニヨリテ祠ハ廢
絶ニ及ベリ又塚上ニ古松アリシガ後年立枯
テ大風ニ吹倒サレ根下ヨリ兵器共數多山タ
リ時ニ村民來リ見テ件ノ兵器ノ中ヨリ未ダ
鉄性ヲ失ハサル太刀ヲ持歸テ家ニ藏セシガ
彼祟ニヤアリケン家葬リテ大病ヲナヤメリ
畏レテ元ノ如ク塚下ヘ埋メシルシノ松ヲ植
維シ由今塚上ノ阿株是ナリト云今土人コノ
松ヲ二本松ト号ス太サ一回半許。

これに加えて次の記載がある。
「甲塚ニケ所」前ノ塚ニ並テアリ一八二畝
三步一八一畝二十六歩何レモ百姓ノ持、此
塚ハ義家首実檢ノ後カノ首ヲ葬リ墳ヲ築シ
故コノ前アリトイフ
「掃鉢塚」前ノ最寄ニアリ形凹ナル故名ト
スト云

「聖塚」村ノ東ニアリ、(フリ仮名と濁点
を適宜加えた)。
現在は白旗塚のみを残している。六本杉と
言われる前には「二本松」の名称が通用して
いたようである。この白旗塚は鉄製の刀剣が
乱掘により出土した点から小豪族の古墳と推
察することができよう。

次に江戸名所図会に「白旗塚 伊興村の中
にあり伝云住古八幡太郎義家朝臣奥州征伐の
時此地に白旗を建て凱歌を唱へしより此名あ
りとぞ、近頃逢此塚上に小祠あり其傍へ立寄
ものあれば崇ありし故社荒廢にをよびけれど
も其儘に再建もせざりしとて今塚ばかり存せ

り「今も此塚の上に登る事を禁ず」此辺の田
面(たのも)を白幡耕地といふ又兜塚と称す
るもの五箇所あり兜首実驗ありし後其首を埋
めたる所とぞ」とある。

寺町について

白幡塚から西進して東伊興町交又点を右折
北進して次の交叉点がまた東伊興町と標示の
ある十字路である。ここを東西に通ずる道路
の南側に流れている大堀が保木間堀である。
この堀にそつて東進するとバス停「寺町」
がある。このバスは竹の塚駅西口から舍人二
つ橋を往復する東武バスである。このバス停
の南方に寺院が十二、集落をつくつてゐる。
土地の人々は誰言うとなく「寺町」と呼ぶよ
うになつた。この名称は正規のものではない
が、一般には通りが良いので、バス停の名称
になるほどに一般化してしまつた。

ここにある寺は昭和初年にこの狭間耕地に
移転してきたものばかりである。狭間耕地は
伊興で最も地盤の高い地域で人家も皆無に等
しかつたので寺院の移住に適した場所となつ
たのであろう。この寺町の主な寺院を紹介さ
せていたたくことにする。

易行院 狭間八七〇

浄土宗で浅草滑川町にあつたが関東大震災
の後当地に移転した。花川戸助六の墓と称す
る石碑のあるのが有名である。

近年は落語家、円楽師匠の生家であるので
この方面でも知られてゐる。

東陽寺 狭間八五四

曹洞宗、戦後単立寺院となつた。もと浅草
にあつたが震災のため当地に移つた。

河村清純「皇朝の歴史」八六二頁
戸田茂隆の碑記

また当寺の西垣隆雄氏は伊興遺跡の出土品
の研究で有名、氏のおびただしいコレクション
ンは貴重な文化財である。

法安寺 狭間九三五

浄土宗、昭和十年谷中から当地に移つた。
北朝の皇祖後深草天皇の法体の尊像が安置さ
れてゐる。この像が当地に來たのは昭和十九
年であつた。當時は出征兵士の見送りの触れ
難ぎがあつた。そのふれ難ぎに似た口上で「
後深浅天皇の木像が竹の塚駅にお着になるか
らお迎えに出るようになつた」とあつた。私もこの
時参加した。七、八十名ほどの人が御像の前
後に行列を作り法受寺までお送りした。この
時何故この像が当寺にあるかとひそかに疑問
をいだいたが、この疑問は今日に至るも未解
決である。この外に桂昌院(五代将軍綱吉の
生母)の墓、丹後宮津城主本莊家累代の墓、
柔術家関口弥太郎の墓碑がある。

この外に寺町には、淨光寺、狭間七八三、
真宗寺、単立寺、長安寺、狭間八四四、真宗
本願寺派、善久寺、狭間八四七、真宗本願寺
派、本行寺、狭間八四〇、真宗本願寺派、常
福寺、狭間八五四、真宗大谷派、正安寺、狭
間八九九、浄土宗、榮壽院、狭間九三〇、曹
洞宗、迦念寺、狭間八三五、真宗大谷派、の
諸寺があつて皆榮えている。寺町の北方が谷
下耕地で毛長堀に沿つて水神橋まで刀の如く
細長く伸びていて、人家皆無の地区であつた
が近年空き地も残り少いまでに家ができてき
た。

湖の宮について

保木間堀にそつて寺町から西方に進むと間もなく右手にこんもりとした森が見える。これが湖の宮である。旧伊興村の人々は「ふじのみや」と濁つて呼称していた。「ふちのみや」と澄んで読んでもわからない人が多い。新編武蔵風土記稿足立郡伊興村の項に、

「氷川社 当村及び竹塚、保木間等三村の鎮守とす。社中に慶長十四年二月十八日の棟札あり、其表面に伊興村氷川大明神、大檀主御代官河内与兵衛知親と記し、其余百姓の名数多見ゆれど、新たに造立せしや、又再興にや詳ならず、別当覚藏院 本山修験、中尾村玉林院配下なり」とある。

別当の覚藏院は今存在しない。右の記事の如く湖の宮は伊興、保木間、竹の塚の三村の鎮守であった。現に境内にある末社浅間神社の石の鳥居に、文化改元子歲四月吉日、保木間村、竹の塚村、伊興村氏子中と刻んである。また正面鳥居前ののぼり立にも同様に三村の名称が彫刻されている。

このお宮の所在地は伊興町谷下三一〇番地である。祭神は須佐之男命、大己貴命、奇稻田姫命の三柱といわれている。

境内には他に末社稻荷神社と阿邪洞大神、熱田大神の石碑がある。石碑には明治廿有一年子六月建立と刻んである。社務所前の手洗には願主先達大乘院、湯殿山講中、当村大舟院 文政二卯年極月日とある。東北の裏手に

には、日露戦後記念碑 希典書とある巨碑があり碑陰に出征兵士氏名等が伊興小学校二代目校長柳子静磨の筆でしるされている。

社殿前の敦石供養塔には保木間村、竹の塚村、伊興村氏子、嘉永七甲寅年九月吉日とある。天保年間に保木間の坂田氏、嘉永七年（安政元年）に須賀三治郎（筆者の曾祖父）が算額を奉納した。

この宮は明治五年から伊興一村の鎮守となり現在に至っている。

毎年九月二十八日「よみや」（「ゆみや」と土地の人は言っていた）。二十九日が祭札で、御日待ともいわれていた。赤飯をたき重箱に詰め南天の葉をのせて親類等に配るのを例としていた。

保木間堀にそつてこの宮から西に進んだ道路は伊興では地盤が最も高く、氷川様の「どて」と呼ばれ用水水べりには桜並木があった。

北方が埼玉県の新里である。その間の田圃は一段とひくく毛長堀違つづいて、「谷下」の名にふさわしく谷底を思わせる風景であった。この道路を更に西に行くと赤山街道と丁字路を作る、そこがまた見沼代用水の支流と保木間堀が合流し左に下ると竹の塚堀で右に上ると順に千住堀、本木堀、西新井堀と合流し古千谷橋に至ると見沼代用水東線用水の本流となるのである。

保木間堀と竹の塚堀の分岐点が「榎の木橋」（はんのきばし）で伊興の北の村外れの一つの目標であった。

応現寺について（その一）

竹の塚の西口を出て赤山街道を北進すると約五百メートル踏道の右側に浜中商店がある。この店の北側の細い道を百メートルほど行き北方を見ると奥まったところに寺が見える。これが応現寺である。

この寺の所在地は伊興町狭間六一二番地、その正式の名称は西嶋山、煎雲院、応現寺である。新編武蔵風土記稿に、

「応現寺。時宗相模國藤沢清浄光寺末ナリ西嶋山ト号ス。本尊三尊ノ弥陀各恵心僧都ノ作ナリ。当寺ハ古ヘ天台宗ニテ八幡太郎義家ノ愚付及ビ寺領ノ朱印アリシガ後皆失シト云。サレド此事疑フベシ。其頃朱印ノ行ハレントモ思ハレス後時宗ニ改メテ清浄光寺ノ末トナリ遊行第代真教上人ヲ以テ開山トセリ。又昔ハ前ニ出セル観音堂（伊興の子育観音のこと）ノ別当職ナリシガ彼堂ハ当時ヨリ程隔タリタレバトテ実相院ヘ職ヲ譲シト云伝ヘリ。寺室ニ八幡太郎ノ乗鞍ナリトテ古鞍アリ銘ニ題斯ノ如キ花押ヲ職タリ。格別後世ノモノトモ見エザレド又ソノ頃ノモノトハ見エズトイフ。

門。四足造ニシテ甚古色ノ竹筋ナリ。度々修理ヲ経ルトイヘドモ旧体ナヲ存セリ。昔欄干ニ飛鳥ノ彫刻アリ刀痕凡ナラス。土人ハ左甚五郎ガ作ナリト語伝ヘンガ、先年賊ニ取サラレント云。」

次に本堂隣接の「常田 隆」家の墓地（こ

の家は伊興町本町三二四九番地に四百年以上前から居住している足立区内でも屈指の旧家屋号「おへや」と呼ばれて来た。常田 進家の分家といわれている家である）に以下するす如き注目すべき三基の墓標がある。

①常田新左衛門常阿之墓

永禄十三年（一五六九）己巳の年武州足立郡伊興村に生れ慶長十年（一六〇五年）己の八月十四日三十七才にて死

②常田新左衛門妻謙孺人市原氏之墓

永禄十二年（一五六九）己巳の年武州足立郡伊興村に生れ元和七年（一六二一年）辛酉十一月五日……以下不明だが、死亡を了してあったと思う。

③藤原姓常田氏彦左衛門府君之墓

府君諱は光能、世、武州足立郡伊興村の人なり。考（亡父のこと）新左衛門諱は常阿、妣（亡母のこと）市原氏伊賀の三女なり。慶長五年（一六〇〇）庚子の七月六日丁未に府君を伊興村に生む。寛文四年（一六六四）甲辰三月二十有六日己丑、府君伊興に卒す。享年六十有五、伊興村応現寺に葬る。

以上はすべて漢文で彫刻してあったものであるが、書き下しに改め、難読と思われる文字には振り仮名を施した。

本堂の右前方、当寺歴代住職の墓地の東前方には、六道四生三界万靈と中央に刻さみ、右に寛永十八辛巳、左に年十月日施主、下方に完倉、彦兵衛と彫刻した碑がある。

応現寺について（その二）

当寺の旧寺域に経塚があった。ここから経筒、六器、五鈷鈴などの密教法具、藤原時代のかぶとなどが出土し現在国立博物館に保管されている。

この寺は全国的にも数少ない時宗の寺院で本山は藤沢市にある清浄光寺である。清浄光寺は、その住職となるために諸国行脚して修業する義務が課せられていて、そのため遊行寺の別名が生れた。また清浄光寺は小栗判官、照手姫の物語りにゆかりの寺でもあり境内にはこの碑が建立されている。

応現寺の山号「西島山」は伊興村の厨子のひとつである「西島」に由来すると思われるが、現在この寺は「北根」に所在する。ただし筆頭壇家の常田氏本家は「大西島」にある。また子育観音堂の別当であったとの新編武蔵風土記稿の記述から創建当時は西島にあったのかもしれない。

伊興村の厨子について

新編武蔵風土記稿伊興村の項に「小名」として、早房厨子、会田、北根、下戸、西島、横沼、と記載され早房のみ厨子が付けられているが、実は他についても字とか小字と呼ばれることはなく現今に至るまで「よし」と称してきたのである。

この読み方は、早房、会田、北根、下戸、西島、横沼である。この厨子は地域の行事などに関するグループであり機能的には小字と同様であって、その運営は数名の年番によっ

て行われてきた。ただしこの区分は地理的に必ずしも明確に分割されたものではなかった。この区分も時代により変遷があり、明治初年には「内出」「会之田」なる厨子名が存在した。（筆者の大伯母の習字手本による）

会田は「あいぬた」から「やんた」となまったらしく考えられ「やんた」なる屋号の家が早房地区に二軒現存している。また「うち」も早房地区にこの屋号の家がある。これらの点から明治初年に存在した「会之田」「内出」の厨子は早房などに吸収されたものと考えられる。

西島は大西島、小西島に分れ、単に大西、小西とばれることが多い。

大正から昭和の十年代までの伊興の厨子は早房、北根、下戸、大西島、小西島、横沼の六であった。（現在の町会はこれが母胎となつて結成されている所が多い）。その頃最も戸数の多いのは早房で四十四軒、最小は大西の十二軒であった。

厨子の大略の地域についてしるしてみる。北根は狭間、谷下、五庵、聖堂の諸耕地で、この中に洲之宮、応現寺、寺町、伊興遺跡が含まれている。

早房は村廻り（本町）の東部、前沼、見通にわたる地区で、この中に「おはやし」のグループがあつて九月二十八、九日の伊興の鎮守洲之宮の祭りに祭りばやしを演奏して、地味に行われた祭礼を盛り上げてきた。

伊興村の厨子について(その二)

早房は伊興では最も早く開発された地区である。昭和の初年にこの地区内に二カ所の村営住宅が建てられた(これは村の財政の一部としての意図であったが、結果はそれに反したようである)。赤山街道沿いには長屋なども建ち、商店も点在するようになった。このため見通耕地、前沼耕地にも旧早房厨子の戸数に匹敵する世帯の増加がみられ、戦時中は駅前(えきまえ)なるグループが誕生して隣組活動などを運営するに至った。

横沼は村廻り(本町)の中心部と大境耕地の大部分、一丁目耕地、槐戸耕地を含めた地域の民家で構成されていた。

この中には実相院(子育観音)、福寿院、若宮八幡宮、苗間戸稲荷神社、五条天神、六万部塚、千葉次郎勝胤墓(以上村廻り)長勝寺(大境)がある。

槐戸耕地には醍醐塚(「でいごづか」と土地なまりで呼ばれていた)仁王島の地名が残っている。仁王島は子育観音の仁王門跡と伝えられている。醍醐塚については不明である。

横沼の地名の起源は、実相院の正規の名称宗光山(放光山)実相院、横沼寺からと考えられる。また逆に地名から横沼寺なる寺号が生じたかは判然しない。

新編武蔵風土記稿伊興村観音堂の項に、「横沼」小池ナリ、大サ十歩許とある。

この小池は実相院墓地の西北方で道路端にあった。周囲には樺などの雑木が若干生い茂

っており、昭和十年頃まで亀が数匹、金魚、鯉が棲息していた。神聖な池との考えから当時の子供達もこれらの生物を捕獲しなかつた。

横沼厨子は高堤(たかどて)堀を境界として東組、西組に分れていた。またその中には隣家(りんか)なる小グループがある。

厨子全体でとり組む行事、すなわち測の宮の祭礼、若宮八幡の祭礼、大般若(後にくわしく詳しく予定)などである。

東西のグループ別に行うものとして嫁婚振舞がある。後継者に対する配偶者が来た時の披露である。この場合他の組の家に対しては個別に嫁(婿)をしかるべき人(近親者など)が連れてまわるわけである。(嫁婿の名をし

るした手拭の如きものを配布しながら)農事実行組合、後の農業協同組合、納税組合も東西に分れてその支部が結成されていた。

隣家は五人組から進化したものと思われるが、近隣の数軒でグループが作られてきた。隣の家でも隣家でない場合もある。

祝儀、不祝儀その他屋根替えなど行事によらず人手を急に必要なら隣家に起ると何を置いても各家が一人は手伝に馳せ参じた。

隣に「遠くの親類よりも近くの他人」とある通り、この隣家は親類以上の存在であって多少質的な変化があるが現在も受け継がれている。横沼の人家は村廻りに大部分あったが

境、一丁目、谷在家境界に各三軒あった。

伊興村の厨子について(その三)

下り戸は村廻りの南部、諏訪木耕地全域と大境耕地の一部から成る地域で、南方は栗原に接している。ここでは約三十戸の民家で厨子を形成していた。

新編武蔵風土記稿から下り戸に関係のある部分を書き出してみる。

「源正寺」新義真言宗、西新井村惣持寺の門徒なり、無量山と号す、往古此所は地藏堂にして、女性寺といへり、今境内に六阿弥陀の号を彫り、延徳三年辛亥六月三日相阿弥陀仏と刻せし古碑あり、さればその頃に時宗の寺なるにや、其後何の頃にや源正寺と改め一寺となれり、中興開山真海明曆二年十月廿七日寂せり、本尊地藏を安ず、

「浄蓮寺」日蓮宗、島根村安穩寺末、本尊三宝を安ず、開基僧日通、開山は常通院日詮と号す、元禄十一年十二月五日寂せり、

「妙幢庵」江戸湯島靈雲寺の末にて、今同寺塔頭宝光院兼帯せり、宝珠山と号す、近き頃まで地藏堂なりしが、天明年中掃部宿の町人嘉七と云者、資財を出して今の庵を修造し、若干の地を買って寄附せしと云、

「諏訪社」薬師寺持。以上が下り戸にあった神社仏閣である。このうち庵寺浄蓮寺から現況を紹介してみる。

浄蓮寺は明治十年台には村廻(本町)三〇八四番地にあった。地租改正の頃の土地台帳には浄蓮寺の所有地が一町三反歩が記載されている。ただ境内は四畝、墓は四坪と極め

ない。境内地は畑となり、その一部は駐車場に、残りは現在「地畑連」の実験農場として枝豆が栽培されている。豆畑の中にある旧墓地には次のような四基の墓石が現存している。

南面して一列に立つ墓石の東端にあるものは欠損している。東から二番目には、元文二丁巳天六月二十四日、学英院日映大徳の銘文がある。次のものは寛政十一己未天九月二十五日、法成日就法師靈とあり、西端は、元禄十一戊寅十二月月上旬五日、派興常通院日陰大徳とあり、これは北側に倒れたままである。新編武蔵風土記稿から当寺の開山の墓であることが知れる。以上はみんな台石を入れて三尺にも足らぬ貧弱な墓石である。

「妙幢庵」は土地の人は「地蔵さま」と呼んでおり、妙幢庵では一般の人には通用しない。現住所は伊興町本町三〇八二番地で、傾いた本堂が現存し、磯貝氏が数十年来居住している。本尊は妙幢菩薩(地蔵)でありその厨子が他の三つの厨子とともに安置してある。境内は七畝十八歩、墓地十五歩と明治十年頃の台帳と記載されている。他に所有地が村廻りと大境両耕地に二反六畝歩ほどあった。

本堂正面に「地蔵尊」とした額があり、厨子の上方には昭和二十一年四月吉日、奉納、地蔵尊、伊興村下り戸老婆一同。とした垂れ幕がある。本堂南方にはこの庵には不似合なほど巨大なる手洗がある。その大きさ、

新七三センチ、横一六六センチ、高さ六二センチの石造りの本体が六五センチメートルの台に安置されており、弘永元年十一月吉日、東都惣世話人、講元、新吉原仲之街、信濃屋善兵衛の銘文がある。

伊興村の厨子について(その四)

「お諏訪さま」

旧伊興町諏訪木二二八一番地(現西新井四丁目三五)に所在する神社で祭神は健御名方命である。これが諏訪神社である。

このお宮は昔から今に至るまで旧下り戸厨子の人たちにより管理運営されている。いわば下り戸の氏神である。毎年八月二十六日が

「よみや」で二十七日が祭礼である。祭礼当日は隣接の厨子横沼の場合お八つ時から農仕事を休み参詣したものである。私も幼時祖父に連れられて蛇のように曲りくねった田圃道を歩いて、一望稲田の中にあつたこの小さいお宮を参詣したことがあつた。

西耕地と俗称されていて西方、北方、南方の三方には家一軒も見えない大耕地の中の小祠にもこの日ばかりは数軒の出店が出て、にぎわいを見せていた。

現在は、土地改良により区画整理されて補助線二五三号と補助線二五〇号道路の交差点の角地で車の往来が頻繁になつている。

このお宮を伊興の人は「お諏訪さま」がなまつた「おっささま」と呼んできた。今でも古老などは諏訪神社では却つてわかりにくい。「おっささま」なら直ぐ通じるのである。

「でいしさ」から更になまつた「でっさま」と呼んできた。ついでに測之宮の氷川神社は「ひかわさま」とは呼ばず「しかわさま」と発音する人が大部分であつた。近年教養のある人が増加して誤つた読み方は大部訂正されてきたが、反面古来の正しい呼び方が一般教養や常識にさまたげられ黙られて例も少くない。このお宮の所在地「すわのき」を「すわぎ」と誤り読む人が多いことは前にもした。他についても本木は「もとぎ」であるのを「もとぎ」と、保木間は「ほきま」であるのを「ほぎま」と誤読する人がいる。

諏訪神社は葵師寺持であつたが明治初年の神仏分離の際若干の土地を付けて独立した。このお宮について次のような伝説がある。

昔下り戸の人々はこのお宮を相当期間放置して省りみなかつた。ために御神体はお怒りになり信州の諏訪大社にお帰りになつた。その道すじは一人通行できる幅で信州まで稲が倒伏していた由である。以来この土地は不作続きで農民は困窮した。この原因がわからないので「口よせ」を招いてお伺をたてたところ、下り戸の住民某氏に諏訪の神靈が乗り移り世話人共を呼びつけ一人二人に非礼の数々を指摘した。それがすべて適中したため一同恐れ入り直ぐさま神靈を再び信州諏訪よりお迎えして祭礼を立派に執行するようにしたところ靈験あらたかにたちまちものとごとく豊作をむかえることができたとのことである。

右は西新井ゴルフセンター代表取締役、矢萩日八郎君の語るところである。同君は諏訪神社の氏子であり、また伊興小學校時代の同級生に今を時めく宮田輝君がいる。

伊興村の厨子について(その五)

「小西島」

伊興村の西北部、北方は古千谷に接している厨子が小西島である。村廻り西北部、吉浜耕地、聖堂耕がその地域であつて一般には「小西」と呼ばれている。この地区内に薬師寺と天神社がある。新編武蔵風土記稿に

薬師寺、曹洞宗江戸橋場惣泉寺末、医王山ト号ス本尊薬師、行基ノ作ナリ開山ハ爾州政和尚万治二年八月九日歿ス。

としるされている。この薬師寺の所有で境内と別に離れた場所の小墓地に古い墓標を発見した。

それは伊興三六〇三番地一畝一三歩共有地小櫃清治郎外三人と明治初年にはしるされていたものである。この小櫃清治郎家は退転し現在は小櫃忠藏家の墓地となつてゐる。この古い墓標にはつぎの如くしるされてゐる。

①故平姓小鎖喜兵衛正重常流之墓

其の先世総州小鎖こいづつの人天文年中祖父小鎖藏人來りて居を武州に移す、父は小鎖加賀正連母は田子紀伊安いづみの女、天正五年丁丑九月廿四日甲戌いづみ岩付城下の邑むらに生る、寛永十二年乙亥二月九日庚寅五十九才にて足立郡伊興村に病死す、乃ち葬る。

②故平姓小鎖市左衛門利直之墓

小鎖喜兵衛正重の二男、母は飯篠雅楽助綱吉の女、慶長十八年癸丑三月廿八日丙戌に武州足立郡伊興村に生る。常州笠間の城主井上河内守正利公に仕える。承応四年乙未二月廿九日四十三才にして江城に病死す。則ち此の旧里に葬る。

③故平姓小鎖千松之墓

父は小鎖与五右衛門素伯、母は水戸七兵衛の女、正保元年甲申二月八日丁卯、武州江城に生る。明暦四戊戌三月十五日壬子行年十五才にして足立郡伊興村に病死す。乃ち葬る。

④故水戸氏米菟人墓

父は水戸七兵衛吉則の一女、母は横井作右衛門重行の女。元和四年戌年三月十八日丙辰備後□之城下に生れ、小鎖与五右衛門素伯に嫁す、寛文二年壬寅十二月十八日四十五才にして足立郡伊興村に病死す、乃ち葬る。

⑤故平姓小鎖与五右衛門素伯墓

父は小鎖喜兵衛正重の一男、母は飯篠雅楽助綱吉の女、慶長十年乙巳三月十六日庚辰武州江城に生る。奥州合津城主中将正之公(会津の保科正之)に仕かう。寛文二年壬寅四月十三日行年五十八才にして足立郡伊興村に病死す。乃ち武州下足立郡澁江在伊興村の田中に葬る。

⑥故飯篠氏祐奥人墓

父は飯篠雅楽助綱吉、母は大家築後の女

天正八年庚辰六月十二日戌、総州葛飾郡□□□□に生る、小鎖喜兵衛常流に嫁す、寛文九年己酉九月廿三日壬丑行年九十才にして足立郡伊興村に死す。乃ち葬る。(原漢文)

伊興村の厨子について(その六)

「小西島」続

小櫃家の墓石は本誌七四号応現寺の項にした常田家の墓標と併せて三百年以上前の当伊興村の住民の生没年と若干の履歴が判明したのは望外の幸運であつた。これを足立全区に及ばせば江戸初期の足立の住民の人口その他を知る有力な手がかりとなるであろう。

「粟さま」

薬師寺のことを、伊興の人は古くから「やくさま」と呼んできた。曹洞宗に所属する禅寺である。この「やくさま」には大般若さま(鉄眼版大般若経六百卷)が保管されている。この大般若経は六棹むすほの箱に納めて毎年六月二十六、七の両日は村中の家を一軒一軒廻る年中行事がある。これを「大般若」と略称している(土地の人は「でいはんにゃ」と呼んでいる)。

大般若経は、正四角柱の木箱に納めたものを「むしろ」で包み上面に丈夫な担棒を付け荒縄で固定したものを、男二人で六月二十七日は地根から早傍、横沼の順に、また二十七日は下り戸、大西島、小西島の順に一軒一軒奥座敷に安置して廻るのである。

この場合に各戸を廻るには順番が古来定ま
 っていて俗に大般若廻りと唱えられていて、
 急を要する触れ継ぎなどに利用されていた。
 ただし寺院には大般若経を搬入しなかった。

伊興の村高について

本稿のはじめに、伊興村の村高は二千石と
 書いたが、実は江戸時代の表高は幕府の直か
 つ地(天領と称し、また御料所とも呼んでい
 た)が九百五十四石二斗四升九合五勺、寛永
 寺領(東叡山領と称し、御神領と呼ばれてい
 た)が九百二十二石六升七合で合計壹千八百
 七十六石三斗一升六合五勺となり約二千石が
 表高である。しかしながら内高(実取高)は
 三千石を超過していた。

寛永寺領伊興(東台上知ともいう)につい
 ては新編武蔵風土記稿に

前略……

御入国(家康の入部)ノ後ハ御料所ナリシ
 ガ天和元年高殿院殿(四代將軍家綱の御台
 所、伏見宮貞清親王姫宮で安宮と号し諱は
 顯子)御供料トシテ三百余石貞享元年敵有
 院殿(四代將軍家綱)御靈屋料トシテ五百
 石余東叡山ニ附セラレ……とある。

次に明治十一年現在のものをするすと、

伊興村「地引帳」総計

合反別式百七拾七町七反七畝七步

内反別式反壹畝四步 □口畝(街道)

民有地

第一種

田反別式百四町四反式畝三歩

此取獲米式千八百九拾九石六斗九升四合

地価金拾貳万八千八百拾壹円五拾四銭六厘

畑反別五拾六町貳反四畝拾八步

此取獲麥七百四拾七石六斗壹升六合

地価金壹万八百五拾七円三拾四銭四厘

宅地反別拾四町五反六畝 步

内反別式反壹畝四步 □口畝

此地価金四千四拾五円六拾貳銭五厘

内訳

宅地反別拾四町四反六畝步

内反別式反壹畝四步 □口畝

此地価金四千廿円廿銭五厘

学校敷地反別壹畝步

此地価金廿五円四拾銭也

小以反別式百七拾五町貳反式畝廿壹步

此地価金拾四万三千七百拾三円四拾九銭五厘

第二種

墓地五反七畝拾步

官有地

第一種

社地五反拾五步

此地価金百廿八円廿七銭也

第二種

悪水路反別式反四畝拾壹步

堂宇敷地反別式反式畝廿三歩

小以反別四反七畝四步

第四種

寺地反別九反九畝拾五步

此地価金百五拾貳円七拾貳銭八厘
 右者今般地利租改正ニ付各自所有地反別地価等
 可申上旨御達ニ付取調候処前對之通り相違無
 之依テ一同進署ヲ以申上候也
 明治十一年 第十六区五小区

第六月

總代人

渡辺徳左衛門

岩井 民蔵

幸野 佐七

地租改正掛り宮城 孝三

濱中 正富

小川 正平

坂田 安治

榎田 雅徳

区长

東京府知事楠本正隆殿

伊興の村高について (2)
合反別式百七拾七町五反九畝拾四步

内

田反別式百四町四反式畝三步

内訳

沓等 拾七町沓反四畝式步

式等 拾九町五反四畝五步

三等 三拾沓町三畝三步

四等 三拾五町式反八畝拾四步

五等 三拾九町六反式畝廿四步

六等 四拾三町六反四畝廿三步

七等 拾三町五反六畝拾八步

八等 四町五反八畝四步

畑反別五拾六町式反四畝拾八步

沓等 六町四畝廿八步

式等 拾町沓反式畝廿六步

三等 九町四反五畝拾八步

四等 拾四町七反沓步

五等 拾沓町六反三畝步

六等 四町式反八畝五步

宅地拾四町四反六畝步

内

沓等 五町六反九步

式等 六町沓反六畝七步

三等 式町六反九畝拾四步

基地五反七畝拾步

稲干場三步

塚 式畝六步

官有地

神地 五反拾四步

学校敷地沓反步

寺境内沓町七畝三步
堂宇敷地沓反五畝五步

塚 式畝式拾步

荒地沓畝廿步

計沓町八反七畝四步

番外

字西新井堀 長千六十九間 巾平均四間

養水溝沓町四反式畝拾六步 但し土揚共

字木木井堀 長千貳百拾貳間 巾同断

養水溝沓町沓反四畝拾六步 同断

字千住井堀 長八百五十九間 巾同断

養水溝沓町沓反四畝拾六步 同断

字竹塚井堀 長八百五十八間 巾同断

養水溝沓町沓反四畝拾貳步 同断

字保木間井堀長七百七十間 巾平均三間

養水溝七反七畝步 同断

字谷下井堀 長三百廿六間 巾平均沓間

養水溝沓反廿六步 同断

字竹塚井堀 長六百廿七間 巾平均式間二五

養水溝四反六畝廿四步 同断

字六月井堀 長七百拾九間 巾平均式間五合

養水溝五反九畝廿八步 同断

字吉浜井堀 長五百廿四間 巾平均式間

養水溝三反四畝廿八步 同断

字諏訪之木井堀長五百九十三間巾平均式間五合

養水溝五反式畝廿沓步 同断

字大境井堀 長七百五十式間巾平均式間六合

養水溝六反五畝五步 同断

字大境井堀長四百五十沓間巾平均式間六合六夕

養水溝四反式步 同断

字鶴根井堀長三百三十沓間巾平均式間六合六夕

養水溝式反九畝拾九步 同断

字諏訪木井堀長三十六間巾平均式間六合六夕

養水溝三畝六步 同断

字西新井堀長八百八十間巾平均式間六合六夕

養水溝式反四畝廿六步 同断

字京傳井堀長式百六十六間巾平均式間六合六夕

養水溝式反三畝拾九步 同断

字谷下惡水堀長百五十式間巾平均沓間五合

惡水溝七畝拾八步 同断

字狭間惡水落長、八十間巾平均式間

惡水溝五畝拾步 但し土揚共

字前沼惡水落長式百三間巾平均式間

惡水溝沓反三畝拾六步 同断

字谷下堤長五百七十沓間巾平均三間五合

堤敷六反六畝拾九步

番外
小以反別拾町九反四畝廿式步

總計

反別式百九拾町四反沓畝六步

右取調 書上候通り相違無御座候也

明治十一年 第一月

以上は常田隆家のものを借覽し筆写したものである。用惡水についての記載も、伊興を通過する用惡水は旧舎入地区を除く他の足立の町村に影響をあたえるものである。やや繁雜とも思われるが敢て記述した。なおこの地引帳には道路の記載はない。

「おちばさま」について

おちばさま、とは「お千葉様」すなわち千葉次郎勝胤の墓を昔から土地の人は呼び伝えてきたのである。多くの土着の人たちに正式に千葉次郎勝胤と聞いてもわからない。それが「おちばさま」と聞けば直ぐわかるのである。新編武蔵風土記稿に

墳墓

千葉勝胤墓、村ノ中央小名横沼ノ内長勝寺ノ免田ノ傍ニアリ長五尺許リ碑面ニ千葉次郎勝胤公墓ト記シ下ノ方ニ宮城三右衛門市原四郎兵衛宮城忠左衛門常田次左衛門等四人ノ姓名ヲ彫タリ、サレド卒年ヲ載セス此四人ノ内三右衛門ト次左衛門トガ子孫ハ今ノ村民林蔵(宮城)次左衛門(常田)ニテ其余二人ノ子孫ハ廃家トナレリト云。此所ニテ勝胤ノ墓アルユヘヲ問ヘド土人モ米由ヲ知ラズ。思フニ既ニ小田原役帳ニモ千葉ノ所領ノ由載タレバ其領地ナル故当所ヘ弾シナルベシ。又下ノ方に彫セル四人ノ者皆彼ノ家人ナル故追福ノ為ニ建シナラン。林蔵カ家ニ古キ私録ノ過去帳アリ其内ニ千葉次郎勝胤公永禄七甲子正月八日ト載タリ又本郡佐野新田名主勘蔵ハ勝胤ノ子新蔵胤信ガ子孫ナリ彼ノ家伝ニヨレバ勝胤ハ里見義弘ト北条氏康鴻ノ台合戦ノ時永禄七年正月八日打死セシト云。按ニ小田原記及ビ其時ノ戦ヲ記セシモノニ勝胤ガ打レシコトハ見エズ且千葉系図ヲ記セシモノニ此人ハ千葉介孝胤ノ子ニシテ天文二年五月廿二日卒

ストアリ。又或人ノ所蔵セシ家譜ニコレバ当家廿二代千葉介孝胤ノ嫡男ニテ始メ太郎或ハ鶴野九ト号シ後千葉介ト改ム。文明二年ニ生レ享禄五年五月廿一日卒ス法諡ヲ常蔵院其阿弥陀仏行歳六十三ト載タリ。尤モ享禄五年ハ則天文改元ノ年ナリ。コレニヨレバトカク天文ノ初ニ卒セシ人ナラン永禄七年ノ伝ハ恐クハ非ナラン。以上

右の記述で勝胤公とあるが、墓石をよく調らべて見るに公の文字は認められない。この風土記稿の記載がその後南足立郡誌に継承されている。勝胤の墓域は現在でも長勝寺の所有になっている。しかし足立区史等に長勝寺の近傍とあるのは誤りで、実相院(子育観音)の太鼓橋のすじ向いの藤波勝喜(本町三二二)

二) 藤波利雄(本町三二二)の両家の間に南北に幅五尺、長さ十余間の墓地に至る参道がある。この墓の供養は宮城氏や長勝寺関係者等により行われて来ている。旧領主と思われる勝胤の事は戦国の世の負け組であつた故くわしいことは伝えられないのは遺憾である。この墓石に年号が彫刻されていないのは一大欠点であるが、事情があつたのであろう。四百余年の星霜を歴た古風な文字が参道を合む墓域と共に現在まで保存されているのは当地の貴重な史蹟である。この墓について明治大正頃まで歯痛の時祈願すると治るといわれていた。

近郷近在に伊東の信首様、豊後あらたかな子育観音として信仰をあつめて来たこの「おちのんさま」を、新編武蔵風土記稿は次のようにしるしている。

観音堂

正観音ヲ安ニ行基ノ作ナリ土人伊與ノ観音ト称ス縁起ノ略ニ云康平六癸卯ノ春源頼義父子奥州征伐ノ時村内応現寺ニ宿陣アリコノ観立ニ定願アリシカバ勝利ヲ得タリサレハ掃落ノ功十三町ノ寺領ヲ附セラレ其後承德年中武蔵守成実位階ヲ拾テ東国ニ下向シ此堂ニ参籠アリ掃依ノ余仏閣ヲ建立セシニ文永元年五月十七日祝融ノ災(火災)ニカカリ寺宝記録ヲ失ヒシ由……中略……其頃ハ境内モ広大ニシテココヨリ西ノ方六七町ニ仁王嶋ト云字アリコレ昔当寺ノ仁王門アリシ所ト云。鐘橋。安永五年九月十八日ノ鑄造ナリ。横沼。小池ナリ大サ十歩許。別当実相院。新義真言宗西新井村惣持寺末放光山ト号ス鐘銘ノ序ニ放光山者行基ノ草創ト記シテ又末ニ宝光山ト出シ文字混シテ記セリコレ等ハ其頃文字タガヒニ用ヒシニヤ又コノ序文ニヨレバ当寺古ハ台教ノ寺院ナルベシ本尊十一面観音ハ弘法大師ノ作ナリト云。天神社。稲荷ヲ合祀セリコノ所ヲ御懸掛跡ト云有徳院殿(八代將軍吉宗)此辺へ腰御籠置アリシ頃コノ所ノ御休ヲヒ揚

フリ其跡ヲ移サンコトヲ恐レテ後小祠ヲ置ト云。

右の記述の如く観音堂と実相院は別であったが、明治四年願により観音堂を実相院の本堂とし今日に至っている。観音堂は実相院檀家の外、観音堂の信徒により維持されて来たので、現在でもこの考えの信徒が存在する。

この寺の正規の名称は宝光山実相院横沼寺で野子名の横沼はこれに由来する。風土記の横沼は本堂西北方にあった。宝婦八年版の縁起にはこの横沼の中にある霊木で行基菩薩が現在東京都の重宝に指定されている正観音を彫刻したといわれている。

正門の百メートルほど南方の地点が大門跡といわれていて道路の中央に数年前まで樺の巨木があった。この木は八幡太郎義家が当地で中食の折箸の代りにけやきの枝を用い、地にさしたものが成長したと伝えられていた。この大門跡の西方路傍に天神の小祠があった。現在は若宮八幡境内に移してある。此処が吉宗の休憩跡である。

風土記、縁起に子育観音の記述はないが、何時の頃か子育の信仰が生れ、妊婦や乳幼児を持つ親の信仰をあつめていた。太平洋戦争の前までは本堂の西の壁面には両の乳房から乳汁を噴出させた絵の絵馬が数百枚常時掲げられていた。故吉田政造氏の作品が大部であった。人工榮養の今日この風習は絶滅した。

仁王門跡といわれる仁王島は足立工業高校の西方三百メートルの地点である。

弘法大師と伝えられる十一面観音については不明である。

本堂裏、先代住職榮庵、先々代伏竜兩氏の墓地の傍にある百万遍供養塔はもと正門前の路傍にあったが、戦後倒れた時傍に居た子供を死に至らしめたため、道路標示のあるにもかかわらず移転したわけである。

鐘銘云々の記事は鐘が戦争のため供出されたので確認の方法がない。

「長勝寺」について

千葉次郎勝胤にゆかりの深い寺で伊興町大塚一七六一番地に所在するが新編武蔵風土記稿には左の如くしるされている。

「長勝寺」日蓮宗下総国葛飾郡中山村法華寺末、寿福山ト称ス本尊三宝ヲ安ス開山(初代住職)智勝院日座寛文九年六月廿二日寂セリ開基(寺院設立者)ハ名主林蔵が先祖宮城清左衛門吉重ナリ元和八年当寺ヲ起立シ自カラ逆修シテ法名蓮華院長勝日法トイフ則寺号トス吉重ハ寛永十四年(一六三七年)正月十三日病歿セリ宮城ノ由緒群ナラズ私録ノ過去帳ニ宮城加賀守藤原吉次法名日妙トアリ又領家村実相寺ノ古過去帳ニモカク記シタレド卒ノ年代ヲ記サズ又宮城系図ニハ此人ヲ戴ザレド清左衛門ノ先祖ニシテ千葉氏ノ家人ナリシ由ハ家ニ云伝ヘリ。以上

この寺には他の多くの当地の寺院の如く山門は無くその相当位階の路傍に二基の石塔がある。右方にあるものには正面に南無日蓮大菩薩、右側面に五百五十年遺跡、施主檀家中左側面は惟時天保二卯年十月十三日、二十八世鼓昌院日行(花押)と彫刻してある。左方の碑は正面にひげ題目、南無妙法蓮華經とその下に奉鳴首題三千部供養塔、寿福山長勝寺とあり右側面は現世安穩後生善処所願具足心大観喜、願主開持院妙圓日要とあり、左側面に維時宝曆十亥辰年五月日慈母為報恩管之、雜司谷清度山住日刻と刻んである。この銘文にある日行、日襲、日刻については現任職四十一世飯島玄忠師にお聞きしたが不明との事であった。当寺に大正十五年十一月に東京府に提出した「長勝寺明細書」と標題のある報告書の控が現存している。これによれば当時の檀家は拾戸であった(現在は百余戸に増加)財産としては一町歩余の農地は全部農地解放により失われた。現在も引続いてこの寺の所有地として残ったものとして左の二筆の土地がある。

一、原野 六歩 三三四七番地

これは六万部塚のことである。明細書に、

六万部の由来

当山開山知勝院日座聖人尊創己未宝祚延久邦家安穩ノ祈誓ヲ籠メ小石ニ首題ヲ書写シ之レヲ邑ノ中央ニ奉埋シテ聖人日夜ノ別ナク妙典説簡ノ法戸絶ニルコトナカリシト云土人六万部ト称シ今ニ尚ホ其ノ跡歴然トシテ現存ス

長勝寺道の道跡を北に約二百メートル俗称七曲りという道路の交点丁字路の角がこの塚で土地なまりでロクマンボと唱えられてきたものである。このため附近の家の屋号をロクマンボと呼ばれて来た。

一、墓地 二十三歩 三二一一番地

千葉次郎勝胤墓あり（通称千葉屋敷）

右の如く大正末年には先に記した「お千葉さま」の外に千葉屋敷の別称があったことが判明した。千葉氏の居宅跡であろうか。

「若宮八幡」について

伊興町本町三〇三〇番地に所在する当社はもと無格社であったが規模は優に村社に匹敵する。祭神はこんたけりのみこと田別命（応神天皇）で厨子、横沼の鎮守で古来横沼の人によって維持されて来た（現在は伊興町中央町会）。例祭は毎年九月十五日である。当社の境内に次の各神社が祭られている。

北野天満宮、もと伊興町本町三〇三〇番地に所在したが、同所が消防団用地として使用のため戦後当地に移築された。八代將軍吉宗ゆかりのお宮で、古来書道上達の祈願として児童の作が奉りて来た。

胡録神社、もと大境の杉本、且間両家の所有地の境界の小高い岡の上にあったが戦後当所に移された。一般に大六天様といわれた祭神はかしたのたかみこと湯母陀瓊命といわれている。

「福寿院」について

伊興町本町三〇〇九番に所在、実相院と道

路を隔たてて西南の角地の境内に同院經營の幼稚園と並んで建っている。阿麻山と号し本尊は不動明王、真宮宗叟山派でもと西新井持寺（大師）の末寺であった。萱茸の本堂があったが、昭和二〇年四月の空襲でB29により投下された焼夷弾のため焼失した。

福寿院は伊興小学校の発祥の地でもある。それは明治七年に公立新井小学校四番分校として開校された同小学校の仮校舎にあてられたからである。

横沼には厨子持の「御酒台」と呼ばれた組立式の屋台（四畳半程のもの）があつて、九月二八日二九日の測之宮の祭礼の時横沼厨子の年番の勤務場所として福寿院と実相院の前の路傍に四斗樽を土台代りにして組立てられ祭礼が済めば分解して福寿院に保管を依頼されて来た。このため前述の戦災の折に焼失した。

当院の山門の前に次の如き石碑がある。正面に、妙法心正院殿孝親禪定位と刻し、側面に本國駿河生國武藏朝比奈八右衛門尉藤原正清、寛文十二壬子三月二十八日とある。

伊興に朝比奈姓の旧家の存在はなく、足立区内においても同様である。当地に何故この人物の碑があるのかは目見当がつかない。

当院は永く無住であったが、昭和初年現住職亀井宗忠氏が赴任され現在に至っている。

「苗間戸稲荷」について

伊興町本町三二〇五番地に所在する小祠である。祭礼は二月午の日である。近年まで付

近十行たらずの民衆が稲荷尊を崇敬して維持して来たお宮である（現在は中央町会）。

境内には昭和四七年二月二日付で東京都知事から「保存樹」に指定された黒松の巨木がある。その樹は二〇年程前には竹の塚から発見された。またこの松を中心に百ノール前後の距離に前述の実相院、福寿院、長勝寺、六万部塚、千葉勝胤墓、若宮八幡等があり、北方にある常田、宮城両家にかけて旧伊興村の中心部である。

真国寺と伊興銀行について

真国寺は伊興町本町二七一五番地に所在し日蓮宗で、もと千葉県中山の法華寺の末であった。新編武蔵風土記稿に

「真国寺」日蓮宗下総國葛飾郡中山村法華寺末蓮栄山ト号ス建武年中（二年、一三三五年）ノ起立ト云ヘド詳ナラズ今開山ヲ経蔵院日安ト云天正ノ頃ノ僧侶ナリ本尊ハ三宝ナリ其脇ニ祖師ノ木像ヲ置ク日親ノ作ノ由添状アリ左ニ歟ス

此宗祖之儀ハ応永卅二年（一四二五年）二月春日親上人堪忍力行法御成就之砌御一代法花弘通無難之誓ヲ込於花堂一刀三礼尊像無疑者也

歴長元（一五九六年）申十月十三日

桜井嘉七 与之

元祖聖人日親御作中山日院添得共ニ檀方桜井嘉左衛門奉納之当山之可爲什宝者也

武江谷中 感応寺 日頃代

この寺は久しく無住であった。昭和に入つてしばらくして現住の村尾氏が赴任された時は真国寺にも坊さんが来るようになったかと驚いた由である。

無住時代の末年にあたる大正の震災の後から昭和七、八年の間であったと思う。伊藤銀月という文士が家族とともに居住していた。

その頃の真国寺は田圃の中に孤立した小さなお寺であった。

銀月は本名を銀次といい明治四年秋田県に生れた。日露戦争前後は「万朝報」という當時は著名であった新聞の記者であった。

銀月は明治三十六年末に百字文を提唱して全国に亘つて多くの会員を擁するに至った。

「百字文会」の機関紙第一号「百字文」の中で銀月は

二十七週以前万朝報の懸賞募集読者文芸に何か新しいものを加へて見やうと思つて五行の短文を始めたのが抑も百文字の産声であつた……中略……百字文の目的は、適切な語句を選んで、固く鋭く、叩けばコーンと鳴り、先に触れると何物も破れ裂けるやうな、小気味のいい文章を作るにあつて、之を修練すると、長い文章を書いてもダラシの無く間が抜けたものを出来さないうやうになるの効がある……下略

(明治三十七年六月二十七日稿)

明治三十七年十一月発行の機関紙「百字文」5号によれば百字文会の支部は六十六になつてゐる。銀月は和歌俳句漢詩を作り、南

画風の日本画を良くした。その著書として左の如きものがある。発行所と発行月日を省略して発行順に左に示す。

①人情観的日本史 明治三十七年刊

(2)百字文 第一巻第一号

③純百字文

④日本海賊史

⑤当世二百人 第二巻 三十八年刊

⑥百字文の乗

⑦海国日本

⑧太閤記 明治三十八年刊

⑨妖星伝

⑩世帯女性史 三十九年刊

⑪百字文粹

⑫情の大革命

⑬闇黒日本史

⑭子の半面

⑮社会研究高原生活

⑯万国歴史要領 四十一年刊

⑰新街輪

⑱裏面観的異説日本人 四十二年刊

⑲秀吉と家康

⑳伊藤博文公

㉑銀月文

㉒南朝と北朝 四十三年刊

㉓彗星的人物

㉔日本名勝史 四十四年刊

㉕史説太閤記 四十五年刊

㉖人情観的明治史

⑯大正一世之予言 大正 元年刊

⑰裏面観的日本人 〃 二年刊

⑱女五人 〃 〃

⑲完成大日本民族史 〃 〃

⑳新訂秀吉と家康 〃 〃 五年刊

㉑忍術の極意 〃 〃 六年刊

㉒日本習語史 〃 〃 七年刊

㉓評伝彗星的人物 〃 〃 一〇年刊

㉔五十三次草鞋日記 〃 〃 〃

㉕校正幽囚録 〃 〃 〃 無刊記

以上は現物の調査により確認、以下は広告文にあつたものをするす。

当世一百人(三巻)、偉人達人、万国地理主点、科学新潮、小説出湖、机上図書館、新訳水滸伝、日本女性史、銀月文粹つき影、

銀月は伊藤ヨ一カ堂の社長と親類の由であるが、未確認である。その子女は大正八年生れの女子を頭に五人程あつた。以上

伊興の年中行事について

ここでは、年中行事として終戦前後まで行なわれていたものを取りあげることとする。

一口に伊興の年中行事といっても、伊興村全体に亘るもの、各厨子のもの、個々の家のもの等について考えた場合、それぞれの立場で若干の差異がある。いまその全般について記述する事は困難なので便宜上ここに示す伊興の年中行事は横沼厨子の一員たる私の家すなわち須賀又左衛門家の参加し又は独自に行つてきたものが主であることをお断りしておく。只ここに伊興の年中行事の全般につい

てその共通している部分をしるすと、七夕とお盆の二つを月遅れ（一ヶ月遅れの八月）に行う他は太陽暦で実施してきた。月おくれの理由は終戦時までは伊興の住民の大部分が農家であったので七月上中旬は一番草、二番草の最盛りでお盆休みのとれる状況ではなかったからである。

① 正月

一月一日 年男が神仏に焼餅と野菜の白煮を

供え、家族は朝食に雑煮

一月二日 右と同じ。この日初荷を出荷

一月三日 元日と同じ。この日多く年始まわりに行き、又客も見える

一月四日 元日と同じ

一月五日 元日と同じ

一月七日 七草粥を朝食とする

一月十一日 倉開き。鏡割り（お供くずし）

一月十四日 目玉団子（小正月）

一月十五日 藪入り。大師粥

一月十九日 氷川びしや

一月二十日 二十日こがし

年男は主人か相続人がつとめる。元日から五日まで、朝食前に、焼いた餅に何もつけず神棚と仏壇に供える。里芋、人蔘の白煮も同じく神仏と、門松に供える。おせち料理は、ごぼうのきんぴら、人じん、蓮根、里芋、ごまめ、数の子などで子供の口に合うものはないので、私の場合食物に関する限り正月は楽しいものでなかった。

初荷が一月二日であった故、元日は多くの

場合準備で忙しかった。二日は早朝（神田に行く場合は四時頃）家を出て青物市場に向った。掃宅は昼食時である。

七日の朝はなすなを入れた七草粥（餅も入れた）をたべた。この日なすなを水にひたしたもので爪をうるおし、爪を切った。倉開きは倉をあけ、この日鏡餅を割れ目からこわし、おやつに食べる準備をした。

十四日には餅をつき、小方形に切り柳等の小枝に多く刺して神棚に供えた。夕食には大師粥（でいしげい）と称して小豆入りのうるちの粥にくず米を粉にして作ったひき餅を入れたものを食べた。この日から十七日まで、奉公人や嫁は実家に宿泊のため帰った。やど入りと呼んでいた。

十九日は氷川びしや、講中の人々がクジで定められた宿に集り氷川神社を参拝し、煮メで酒をくみかわした。その時クジで来年の宿と補欠をきめた。宿に当たっても親族に不幸があると「ぼくにかかった」と称し神事はさける習慣があった。

一月二十日は、二十日こがしと称し、麦こがしを作った。こがしは、麦、大豆、米等を煎り、石うす（いすす）でひき、以後のおやつに用いた。その味は家ごとに異っていた。

② 二月

二月三日 節分、立春の翌日

二月八日 八日節句（ようかぜっく）

二月初旬 初牛（はつちま）

節分を「年こし」ともいい、この日までは

節分は「年こし」ともいい、この日までは節分は初の日を彼岸の入りといい、草もち

八日節句は「まがら」と名付けられた小ざるを物干竿の先端につけ、ひさしの上に立てかけて置く。夕食には「けんちん汁」という、豆腐、里芋、大根、油揚げ等を入れた味噌汁を作った。この程度でも御馳走の部であった。八日節句は終戦後廃止された。

初午は二月の最初の午の日で、紙のほりに正一位稲荷大明神と書き、竹を切って竿として稲荷神社の前に立てた。狐の絵のある絵馬を社殿にあげた。私の家では苗間戸稲荷と前の家の徳井家の屋敷神の稲荷線に絵馬をあげていたが、最近絵馬売りが来なくなり廃止した。この日は油揚げその他自家でとれた煮物を食膳に供した。

③ 三月

三月三日、節句、雛祭り。

三月下旬、彼岸

三日は女子の節句で、各家で雛段をかざり白酒、草団子を供えた。白酒は購入したものであったが、草団子はよもぎ（「もちぐま」という）で緑色に染めたものである。

彼岸は初の日を彼岸の入りといい、草もち

(草団子のこと)をつき、中日にはぼたもちをつくり、最終日の明けの日には又草団子を作り、墓参した。これを後先団子に中ぼたもちと称した。ただし私の家では三日の節句に男子も七才までは女子として育てるのを家例としたので男子にも雛人形をかざった。

④ 四月

四月八日、花祭り

釈尊の誕生日で各寺では誕生仏をかざり、信者達はこれに用意された甘茶を注ぎ無病息災を祈念した。

この月は農家では種籾を浸水し、苗代(田間、ねえまと称した)作りをした。

⑤ 五月

五月五日、節句(男子)

この日の前後男子のいる家では鯉のぼりを立てた。また「よもぎ」を摘んで草団子を作った。よもぎが育ち過ぎるためこの後は草団子は作らなかつたので、終り初物となった。五月二日頃が八十八夜と称して立春から八十八日目まで有名な日であるが、特別な行事はなかつた。この前後は種まきの適期で農繁期にさしかかるため大般若まで何もなかつた。

⑥ 六月

六月下旬、さなぶり(早苗振舞)

六月中旬は当地の田植の最盛期であった。水稲の耕作面積は一町歩(一ヘクタール)から二町歩の農家が多く、また畑作は人手のかかる蔬菜栽培であったのでこの時期は多忙を極めていた。また水利の便も西新井堀、本木

堀、千住堀、竹の塚堀、保木間堀が伊興を通過してから足立区内の各地を灌漑していたにもかかわらず新編武蔵風土記稿に干損の地と記載されているほどの土地であった。水くみに多大の労力を要する水田が多かった。その例として五反田耕地、京伝耕地(五京と俗称した)に泣虫(「なきみし」と呼ばれた)と呼ばれた水田があった。これは水くみの重労働に泣かされたことに由来した名称である。

このため明治年間には「ゆい」「いえうえ」と土地なまりで称した)といわれる親類や近隣の協同作業に頼った田植も一日も早く畑作業に手をまわしたい各農家は近年は日雇(「ひようとり」と呼んだ)の力をかりるようになった。この日雇の人は二合半領(現在の三郷市とその周辺)の農家の人であった。二合半は有名な早場米の産地で水稲の単作地帯である故夏場の現金収入を得る必要から五月中に自家の田植をすませて短期の出かせぎに来るわけである。また足立の農家は蔬菜による現金収入でその賃銀を支払った。

田植が完了した日の夕食に酒肴を出して祝うのが「さなぶり」で、これは早苗振舞の略称といわれている。

大般若には村中の家が田植が完了した六月二十六、七日に行なわれた。二十六日は北根、早房、横の順に二十七日が下り戸、大西、小西であった。(本誌80号参照)大般若経六百巻を六さおの正四角柱形の木箱に納めこれに担棒をつけたものを二人でかつぎ、厨子内の

各家を順にまわる行事である。

横沼の場合午後三時早房から引つぐきなりであった。最初の家は常田家(現当主隆氏)で厨子内の各家から一人以上が常田家に集まり待つ、常田家では煎茶を湯茶の接待をするのを例とした。大般若経が各家を巡廻する方法を説明すると、以下の通りである。

当時一般の農家の間取りは片方に田の字形に部屋のある座敷で反対側は土間になっていた。土間の方から大般若経はかつぎ込まれ土足のまま奥座敷に上り下から三、二、一と積み重ね、寸早く庭に飛出す。(土足で通るために「むしろ」が敷かれてある。)

その家の人が屋根に上っていて大ざるに入れた煎餅、菓子、果物(家ごと異なる)を投げる。これを参加者が争って拾う。子供も共に拾う。土の上に着ると今日ではこんなものは食べないが、当時は大般若様だからと食べてしまった。投げ終ると若者は先を争って経箱をかついで次の家に走って行く(このまわる順を大般若まわりと称し、緊急の触れ籠にも利用された)。四十軒をこのように廻り、ど

ん尻が谷在家境の藍塚(耕地名で襦戸)の足立家(現当主長俊氏)である。この家で又煮メで湯茶の接待を受け、地平線迄一望田植のすんだばかりの稲田であった西耕地を横切り子育観音前まで走って帰るわけである。観音堂の道階前で経巻を入れた箱をみこしの如くもむ。これは股引、半てん姿の若者の役目で、みこし、だしの一つ無い地味な伊興

村の唯一のお祭り騒ぎであった。

この大般若は戦時中食料不足で投げる物が用意できず中断、戦後、形を変えて復活したが、十数年前廃止されてしまった。

大般若の一つの効用として、この日に各家で一人以上の人が、厨子内のすべての家を訪問する結果となるため相互理解が深まり、世代間の断絶はなかった。

⑦、七月

七月一日、浅間さま

現在の草加市瀬崎にある浅間神社の祭礼である。「せんぎんさま」と伊興の人は呼んでいて多くの人が参詣した。このお宮は武蔵の国足立郡瀬崎村の鎮守であった。天明年間に花又村（現在の花畑）の金杉清三郎清常と同門の瀬崎の昼間要助義高が算額（数学の絵馬）を奉納した。これは現在は無いが、記録が残されている。

伊興の行事ではないが、この日午後の農作業を早仕舞にして参詣に行く人が多かったのことに記入した。

七月十五日、東京の盆

この日は前にも書いた通りに、農繁期であるため長期のお盆休みがとれないので、大部分の農家では午後の作業を休んだ。

ここに言う東京は旧東京市（昭和七年九月以前）をさしている。足立の人は旧東京市内に行くことを、東京に行くといっていた。

旧市内に親類がある家では盆礼（ほんれい）に出かけた。私の祖父は墓の「つと」に野菜を詰め盆礼（中元）に行くのを例とした。

⑧ 八月

八月一日、高灯笼（たかどうろう）

新仏（最近の一年以内に死亡者）のある家では、庭前に約二メートルの高さに灯笼を作る。親類縁者はこの家に岐阜提灯や花ごぎを持参する。この日から「お盆」が終るまで毎夕灯笼と提灯に点火する。ただし近年灯笼作りは省略されるようになった。

八月七日、七夕（たなばた）

月遅くれの七夕である。青竹を根本から切り、下方約一メートルの枝をなたで落し、笹に色とりどりの短冊に墨で文字を書きつけてつるしたものも庭前に立てる。毛筆で文字を書くのは子供達の仕事である。

八月十二日、盆立て

青竹を三〇〜四〇センチメートルに切ったものを墓石の前に立てることである。

この時墓地を清掃し墓石を洗う。一つの墓石について二本あて竹を立てる（旧家の墓地は十基前後の墓石がある）太い方に花、細い方に線香が上げられる。この竹の家の門から寺の間で自宅寄りにも一対打ちたてる。十三日の仏迎え（たまむかえ）の時ここに来る。

八月十三日、仏迎え、祭段作り。

たたま一枚程の祭段を作り、位牌、仏具、お供え物をかざる、祭段の四つの角に青竹を立て、しめなわの如く上方になわを張り、これにはおすき等をつるす。茄子、瓜に割り箸で足をつけた馬、皿に蓮の葉を敷き茄子をサイの目に切って入れ、上にみぞはぎの花を束ねて置く。これが祭段作りである。

夕方提灯を上げて家の前の道を通えをする子供は小さな提灯を持ってお供する。

八月十五日〜八月十七日、藪入り

奉公人、嫁が実家に宿泊のため帰ること正月の項に書いた通りである。

この間各家では盆礼と称し近親の間で行き来する、十六日（家により前後する）仏送りをする。夕方迎えした場所まで提灯を下げて行く、要領はお迎えの時と同じである。

八月二十四日。うらぼん（裏盆の意か）

この日まで盆中とみなし、盆礼をすることが出来る。午後は休業である。

八月二十七日、お諏訪様

下り戸の項で書いた「おっささま」の祭礼で横沼の場合おやつ（お茶と言った）時以後の作業を休んで参詣に行った。

八月もこの日までは農作業にゆとりのある期間である。このあとは伊興の特産物であった山東菜（漬茶と言った）の插種で多忙となった。この「つけなまき」は遠期のはばが極めて小さく、短期間に広い面積の插種で田植に次ぐ忙しさであった。（つづく）

⑨ 九月の行事

九月十五日、若宮八幡宮の祭礼

横沼の鎮守であるが伊興では八幡様で通用している。十四日が「よみ夜」で二、三軒の出店がでる。のほりが立てられ、掛あんどんが観音様からこのお宮の鳥居の前まで飛びとびに掛けられる。みこし、だし、はやし、の無い静かな祭礼であった。この祭が終ると漬

葉の「うるぬき」(間引)が行なわれる。現在では中央町会が運営し民謡や踊で、にぎやかに来た。

九月二十九日 氷川神社祭礼

伊興村総領守の淵之宮の祭礼である。このお宮は「ふじの宮」又は氷川さまと呼ばれている。九月二十八日はよみや、二十九日は終日休業で赤飯をたいて祝った。早房厨子では終日「はやし」が演奏された。お宮には境内からどてにかけて出店が出た。

九月下旬、秋の彼岸

春の彼岸と大差ないので省略する。

⑩ 十月の行事

十月十七日お十夜(おじゅうや)

毎月十七日は伊興子育観音の縁日であるがこの日を特に「お十夜」と称し大きな行事であった。戦争以来有名無実の存在であったのを昭和五十年十月十七日復興された。

復興については、「……以前は子育、お乳の観音さまとしてあれ程にぎわった伊興の観音さまもすっかり影がうすくなり、往年の面影はまったくない。これではいけない、なんとかしなければという心ある人々の声が出て、今年からまたお十夜の行事が復活することになった。同時に、昔のにぎわいをとりもどすために、いろいろと盛りだくさんの趣向を予定している」といった趣意書が配られ、次のように行なわれた。

場所は、伊興観音である。そして、十月十七日午後五時から十時までである。

行事は、第一部と、第二部にわかれて行なわれた。

第一部は午後五時から、町の善男善女によって、賑やかに、花々しく、観音経の奉納が行なわれ、次に老人達のお念仏が、鐘、太鼓の音に合わせて行なわれ、続いて六時から、観音堂に待望の大護摩が行なわれ、護摩風に当りながら、罪障消滅、福德欣求、五穀豊饒を祈って、復興の喜びにふけた。第一部が終るや、町内の人々の待ちこがれた、奉納の演芸大会が、特設舞台で行なわれ、踊りあり民謡あり、喜びと笑ひにしばし夜の耽けるのも知らぬ程であった。世話人や、檀徒総代、住職の中根快昭氏の話等があつて、楽しい一夜であった。

十月二十四日 大師粥(だいがゆ)

小豆と団子を白米の中に軟かくたき込んだものを大師粥といった。これを、(でいしげえ)と呼んでいた。だんごは白米五合ほどを石臼で粉末として作った。農家の単調な食生活に変化をあたえたものであつて、脚氣の予防という考えも含まれていた。老人は好んで食べたが、子供の口には合う品物でなかった。終戦後は行なわれなくなった。

⑪ 十一月の行事

十一月八日、八日節句

本誌92号二月の行事と同様なので省略、十一月上中旬、お西様(おとりさま)

十一月の最初の西の日(一の西)二回日の西の日(二の西)まれには三回日の西の日(三

の西)は鷲神社の祭礼である。この日花又の鷲神社(花又のおとりさま)や鳥根の鷲神社(鳥根のおとりさま)に参詣する人が多かった。また浅草の鷲神社(東京のおとりさま)に行く人もあった。商家等では縁起物として熊手を購入し、毎年少しずつ大きな物に買い換える風習があると聞いているが、伊興の人ではその習慣のある家は稀であった。

十一月二十四日 大師粥 十月と同じ十一月三十日 荒神さま

かまどの神様として信仰されていた。かまどの近くに小さな祭だんを作つて祭つてある。この日に団子を作つてあげた。火災予防をこの神に祈念したわけである。田植がすみなぶりの時に残った稲の苗を奉納した。

⑫ 十二月の行事

十二月八日、八日節句、前にしるした通りであるから省略する。

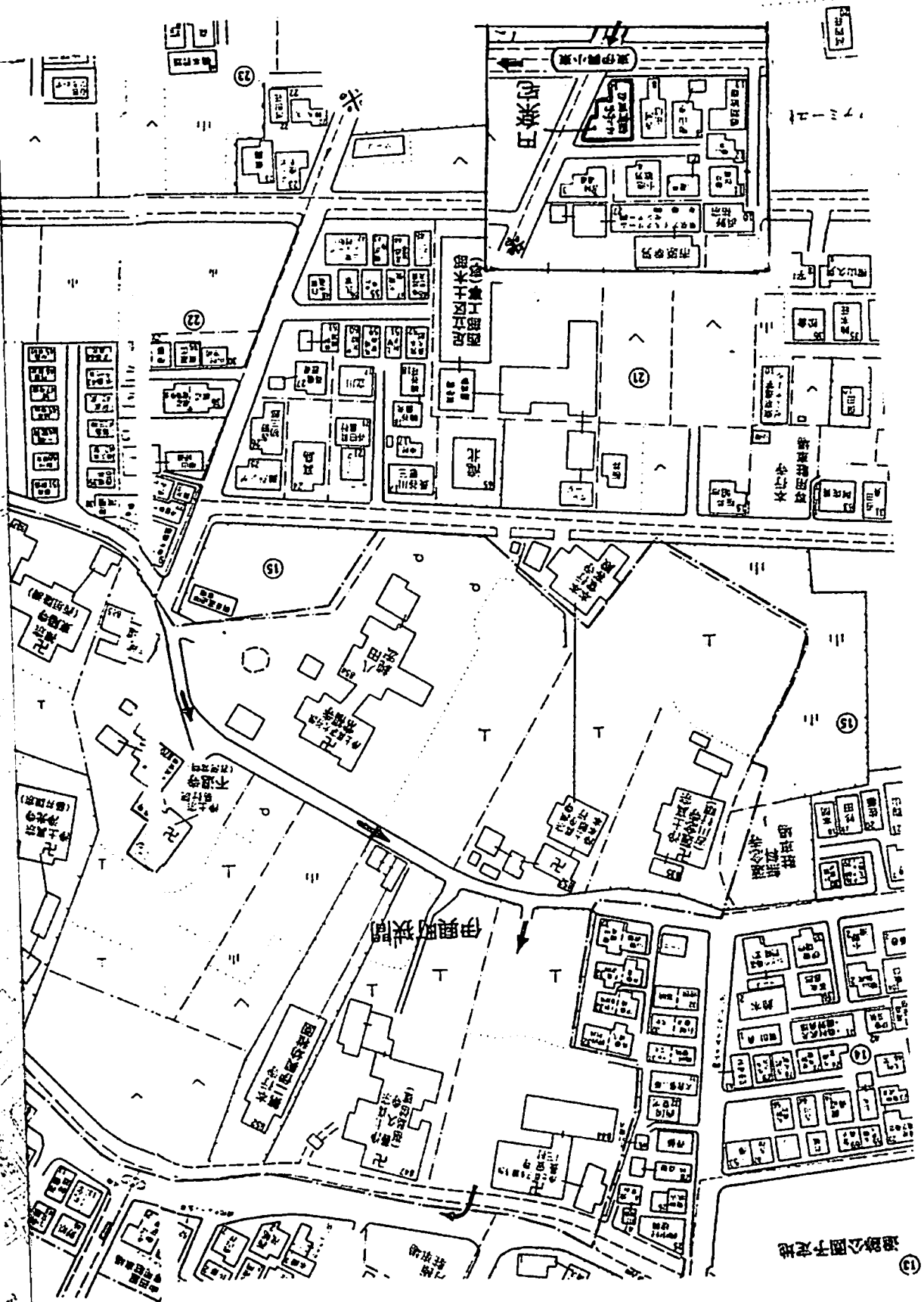
十二月二十四日、大師粥、これも前と同じ十二月下旬、すす払い

現在はプロパンを燃料にするため、ほとんど煤煙らしいものが屋内にたまらないが、以前稲藁なぞを主な燃料としていた頃は一年で天井から「すす」がぶら下つたものである。

これを青竹の先に笹を結んだもので払い落すのが「すす払い」であつて正月の準備でもある。

十二月下旬、しめ縄作り

すす払いの済んだ後、どの家でも自家用のしめ縄を作つた。その方法は自家生産の藁で



13 遊藝公園予定地

伊羅里基路

池田

(角) 池田上町五丁目
池田上町五丁目

北高

23

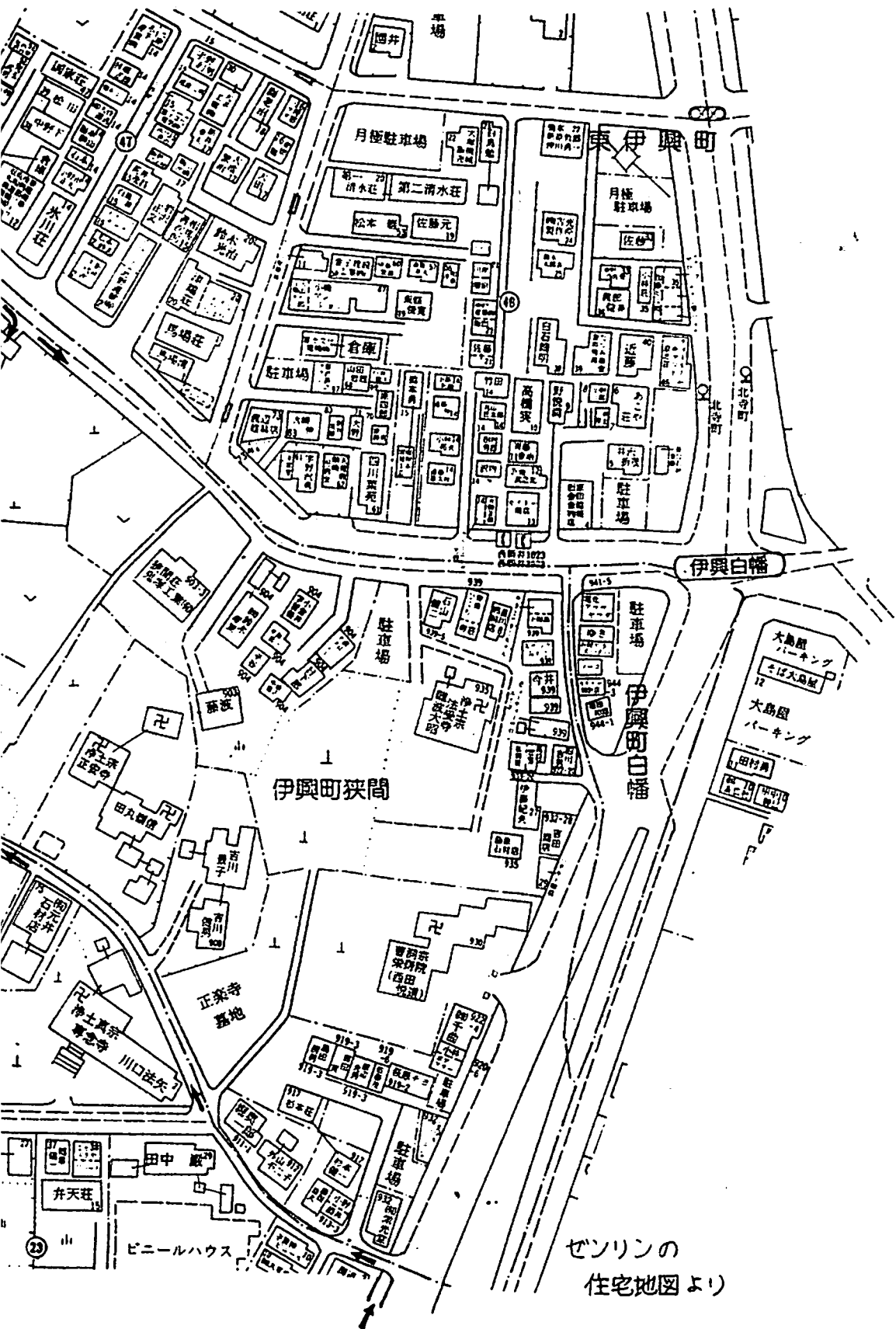
22

15

15

16

13



セゾリンの
住宅地図より